

ウィニコット研究

Journal of Japanese Winnicott Association

vol.1 2022

シンポジウム：ウィニコット・フォーラム 2019「今、あらためてウィニコットを知る」	1
Winnicott の臨床と夢（吉村 聡）	1
ウィニコットの「失敗論」について（恒吉 徹三）	9
テディベアは、移行対象ではない。（増尾 徳行）	18
シンポジウム：ウィニコット・フォーラム 2020「遊ぶことと言葉のあや」	26
遊ぶことと悪ふざけ：鳴き声を抱えること（石田 拓也）	26
遊ぶことと言葉のあや～俳句を通して考える（加茂 聡子）	32
子どもの言葉にひきつけられることとふりまわされること（渡部 京太）	38
講演記録：ウィニコット・フォーラム 2020「遊ぶことと言葉のあや」	
言葉の生まれ来るところ（工藤 晋平）	45
投稿規定	62
理事	64
編集後記	65

Japanese Winnicott
Association

シンポジウム：ウィニコット・フォーラム 2019「今、あらためてウィニコットを知る」

Winnicott の臨床と夢

上智大学 吉村 聡

1. はじめに

Winnicott の臨床をひもときると、夢についての論考が少ないことに気づく。たとえば、Winnicott の臨床を総論的にまとめた「ウィニコット用語辞典」(Abram, 1996; 館監訳, 2006)に、「夢」という項目はない。索引に「夢」という語句が付されている用語があるが、それも「夢スクリーン」のみで該当ページは一カ所指定されているだけである。Winnicott 本人が夢に言及することが決して少なかったわけではないことを思うと、これはいくらか意外でもある。もしかすると、夢の意味や取り扱いについて、あまりまとまった形で Winnicott が議論していないからなのかもしれない。

本稿は、Winnicott にとって夢はどのような役割を果たしているのか、整理してまとめることを目的としている。そしてこのまとめを通して、Winnicott の臨床について若干の考察を試みたい。

2. Winnicott の夢

Winnicott にとって、夢は人生の早い段階から重要な位置を占めていた。

思春期の頃、Winnicott は自分が夢を思い出せなくなっていることに気づいていたという。夢を見られない／思い出せないという症状は深刻であるが、このことを疑問視する点には、内的世界に関心をもつ Winnicott の早熟さがうかがわれる。

このとき相談した司書から、Winnicott は、哲学者 Henri Louis Bergson の本を紹介されたが、当時はぴんと来なかったらしい。そして後年、スイ

ス人牧師の Oskar Pfister から、精神分析に関する著作を紹介され、Freud の「夢解釈」を読んでいる。おそらくこの 1919 年が Winnicott と精神分析の出会いだったのだろう。

Winnicott が「夢解釈」手に取っていた時期は、Winnicott の臨床家としての職業人生にとっても重要である。Winnicott は、第一次世界大戦で外科見習いとして駆逐艦に乗船している。そして戦後、ふたたび医学教育に戻ってこれを修了したのと、Winnicott が「夢解釈」を手に取った時期がほぼ重なっていることが知られている。Winnicott にとって、夢を理解するという分析作業と、従軍という外傷的で凄惨な出来事は近いところに置かれているとっていいだろう。

また、Winnicott が Strachey, J. に受けた訓練分析で報告された夢も有名である。それは、「母親が熊 bear の (裸 bare の) 毛皮で変装している。母親からペニスが出てきて、彼を去勢する」というものだった。Winnicott は impotent であったかもしれないという噂を思い出させるような夢である。

3. 夢 dream と夢見ること dreaming

それでは、夢について Winnicott はどのように考えていたのだろうか。

1954 年にまとめられ、1967 年に書き改められた講義録『人間の本性 Human Nature』で、Winnicott は、「健康な子どもは、性器期的な性を完全に夢見ることができる」という興味深い一節を残している。そして両親の一方に取って代わるという夢全体を可能にすることによって、原光景

が安定の基礎になるとも述べている。現実としての性体験（原光景としての両親の性交）を目撃することが外傷的であるのに比べて、現実と区別された夢見る体験には、子どもの性生活が十分に現れている。つまり夢見ることには、子どもが自分自身という性的存在を十分に生きている証が含まれているのである。こうして本能的経験がもたらす深刻な葛藤は、想像機能によって補われるのであり、これによって子どもは（したがって人は）本能生活も性生活も十分に生きることが可能になるのだろう。

そして最晩年の著作『遊ぶことと現実 *Playing and Reality*』には、こう述べられている。

夢みること *dreaming* と生きること *living* は同じ種類に属し、白日夢 *daydreaming* は別の種類に属している。夢は現実の世界で対象に関係することによく調和し、同様に、現実世界で生きることは夢の世界によく調和する。これは誰にとっても馴染みのことで、とりわけ精神分析家にとってはそうである。しかし、対照的に、空想すること *fantasying* は、エネルギーを消耗するが、夢みることに生きることに寄与しない、孤立した現象なのである。(Winnicott, 1971, p.31)

夢はその中に詩を含んでいる。つまり、意味の層がいくつも折り重ねられている。それは、過去、現在、未来に関係のある、そして内側と外側に関係のある、意味の層の重なりである。そして、根本的にその人自身に関わるものである。(同上, p.48)

夢と夢見ることは、そのうちに詩を含みこむ多層的な体験である。そしてこの夢と対比されているのが空想することである。『遊ぶことと現実』の中の Winnicott は、エネルギーを消耗するような、生きることに寄与しない孤立した現象としての空

想について述べている。

この空想や白日夢 *daydreaming* については、初期の論文『躁的防衛 *Manic Defense*』にも認められる。Klein の影響もあるだろうが、早くから Winnicott の心をとらえていた主題であることも示されている。

内的現実それ自体は、空想 *fantasy* というような語で記述することができる。けれどもそれは、個人的 *personal* であり、組織化され、そして歴史的には幼児期の身体的経験、興奮や快楽、苦痛に関わるものであり、そういった空想を表すために使われるので、いわゆる空想と同義ではない。空想とは、内なる現実を扱おうとする個人の努力の一部なのである。空想と白日夢は、外的現実の万能感に満ちた操作であるということが出来る。(Winnicott, 1935, p.130)

躁的防衛の現れとしての空想は現実生活からも心的現実からも乖離したものであり、空虚で、万能感に満ちた操作による産物である。ここに空想を現実からの逃避や否認として捉えようとした Freud の足跡を認めることも出来るだろう。しかしこれは、たとえば Isaacs(1948)が、空想／幻想 *phantasy* を無意識の内容物であり、身体的で前言語的なものとして体験されると考えていたのとは、いくらか異なっている。

Winnicott が、「防衛としての空想すること」と「生きることとしての夢見ること」を区別しようとしたことから浮かび上がるのは、Winnicott が「生きること」への関心を寄せ続け、生きていることの本質を問いつけた分析家であるという事実である。

Winnicott の弁によれば、遊ぶことは「一つの経験、常に創造的な経験、時間と空間の連続線の中での経験であり、生きることの基本的な形式」であり、「遊びの中で選ばれた外的な現象に夢の意味

と感情が付与されている」(ともに Winnicott, 1968: 『遊ぶことと現実』所収)。このとき、Winnicott にとって「精神分析」は遊ぶことそのものであり、夢みることそのものになっている。

そして夢みることによって患者の心的能力やキャパシティを看取する点は、Bion のコンテナ理論と同様である。しかし Winnicott の臨床をみると、報告された夢に現れた無意識的幻想を解釈するというよりも、患者が精神分析で分析家に伝えたという事実そのものが、つまり患者から分析家への能動的な関与が強調されている。

夢は治療に活用できる。というのも、夢がみられて、思い出されて、**報告されたという事実**は、夢の素材が、これに付随する興奮や不安とともに、その子どものキャパシティの中にあることを示すからである。(Winnicott, 1971b, p.115 ; 強調は筆者)

4. Winnicott の臨床に見る夢

Winnicott は、分析的な交流の中で患者が夢みるようになれる瞬間に臨床的に重要な意味をみている。

一方で、Winnicott の臨床事例を調べてみると、Winnicott がこの瞬間を待つばかりではなく、患者に先立って患者の夢に言及する局面に、しばしば出会う。ここでは、Winnicott の症例から、まず Piggie を、そして次に Mark (「子どもの治療相談面接」所収) のビネットを引用したい。

Piggie は、Winnicott の最晩年の症例である (Winnicott, 1977)。初回面接時、Piggie は 2 歳 4 か月の女の子であり、Winnicott は 68 歳だった。1 歳 9 ヶ月で妹のできた Piggie は、黒ママ black-mammy やババカー-babacar に怯えるようになった。両親との手紙のやりとりをはさみながら、1964 年 2 月から 1966 年 10 月まで、Winnicott は

Piggie と全 16 回の治療面接を続けている (Winnicott はこの面接をオンデマンドの精神分析と呼んだが、刊行された面接記録にはコンサルテーション consultation と表記されている。このコンサルテーションという言葉は、『子どもの治療相談面接 Therapeutic Consultations in Child Psychiatry』にも共通している)。

初回は、Piggie の「とっても恥ずかしい！」から始まった。おもちゃをあれこれ手にとって、「こっちのも...こっちのも...」という Piggie に、Winnicott はくもう一人の赤ちゃん Another baby, sush baby>と解釈する。すると Piggie も、「赤ちゃんはどこから来たの？」と応じている。こうして Piggie は、小さな男の人形を車の運転席に押しこもうとしたり、「うちに猫がいる。今度その子 pussy cat 連れてくるね」と言ったりして、セッションの初回から両親の性交をめぐる主題が、遊びを通して一気に展開していることがわかる。ここでおそらく不安が刺激された Piggie は、母親に会いたがってドアを開けようとしている。

そしてこのタイミングで Winnicott が解釈したのが、夢だった。<怖いんだね、怖い夢を見るの?>という Winnicott の言葉は、Piggie のババカーや黒ママについての思いについて連想を呼び起こしている。Winnicott は箱にたくさんものを詰める Piggie に<赤ちゃんを作っているんだね>と解釈し、散らかったままにしてはいけないと語る Piggie に<ママのこと怒っているんじゃないかな>と、明確な解釈を持ち込んでいる。夢の導入は、Piggie の母親と妹についての連想を持ち込むきっかけになっていて、Winnicott も、かなりはっきりとした解釈を伝えるに及んでいる。夢の導入が、面接の中で、一つの重要なポイントになっていることがうかがわれるのである。別のところで Winnicott は、「夢の素材に触れていくことは、ほとんどすべての症例で繰り返されるが(略)その素材が夢のレベルに近づいたと治療者がいつ感じるかは、微妙な問題である。したがって、『夢を見

ることはありますか』という質問をするのが適当かもしれない」(Winnicott,1971b)と記しているが、症例 Piggie の初回面接で見られた夢の導入が、まさにこれに相当している。

症例 Mark を含む『子どもの治療相談面接』(Winnicott,1971b)には、Winnicott が夢を一つの技法のようにして扱っている場面が、より頻繁に認められる。この『子どもの治療相談面接』は、数回のセッションで終結した症例集である。かなり限られた回数の中で、たくさんのスクイグルが交わされ、このスクイグルが、夢や夢みることの現れとして(あるいは夢に接近するプロセスとして)扱われている。大人が自由連想を報告するようにして、非言語のスクイグルが、2人の間で次々と交わされている。

症例 Mark は、8歳から盗みを始めた12歳の男の子である。16歳の姉、8歳と7歳のふたりの弟がいて、「母乳で育ち、離乳が困難だった」「2歳頃から、決して正直ではなかった」と描写されている。そして弟が生まれたときに、「僕たちの赤ちゃん」といって弟を可愛がっていたことも紹介されている。

初回面接では、2人の間に9枚のスクイグルが交わされたが、最初から6枚目で、Mark のスクイグルを Winnicott は「互いに密着したミミズ」に仕上げた。ここでふたりは、ミミズの環帯や交尾について話しあっているようである。続いて Winnicott のスクイグルを Mark は「奇妙な男の顔」に描き上げている (Mark と Winnicott とのスクイグルは、非常にたくさんの「顔」が描かれている点に、一つの重要な特徴がある)。この Mark の絵について、Winnicott は「Mark が空想を軽視する傾向に気づいていた。この傾向は、『彼は丸太のように眠って夢をみない』という両親の陳述と合致する」と書き記している。

この直後、Winnicott は Mark のスクイグルを「校長先生」に描き上げてから、「夢についての話

題を導入するために、「絵画の想像的な要素を使うことについて話」したと記されている。そして Winnicott が夢について触れたことに、Mark は驚いたようである。この後、ふたりは忘れてしまった夢について話しあい、そして、夢が利用できなくなると、衝動を行動に移すことで夢を取り戻す必要が起こってくるので、夢が実際起こることを支配し、個人の生活や行為の中に再現してくると伝えている。

Mark との面接の最終回である3回目、Mark のスクイグルを Winnicott は Fig.1 のように仕上げた。Mark は Winnicott の描いた顔を「二通りの顔を持つ男」と名づけた。Mark は Winnicott の位置から眉に見えるものを描き加えることで、Winnicott の位置からでも Mark の位置からでも顔に見えるように、あつという間に仕立てあげている。ここで Winnicott は、「盗みに関連した Mark のパーソナリティの解離が示されている。Mark は、自分の分裂にほぼ気づいている段階に達した(私はこのことを解釈しなかった)」と記している。

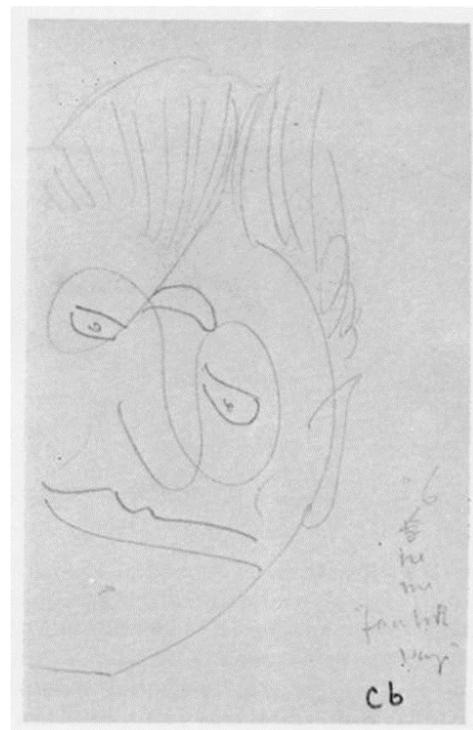


Fig.1 6枚目のスクイグル

そして 10 枚目のスクイグルは「道路にひざまずき、土埃にスクイグルを描いている」ところが描かれている(Fig.2)。Winnicott は、「これは夢だった。これは重要な継起だった。この絵は、抑うつという主題へと導いた」「彼はこの絵を『うんざりした感じ』と呼んだ」とまとめている。

そしてこの後の Mark の言葉も、印象的である。

Mark : 僕がそう感じるの、目が覚めたときにほんの数秒なんです。僕はときどき、おかしい人生だなと思います。たぶん人生そのものが夢なんです。

このスクイグルを経て、Mark は、8 歳頃、姉が麻疹にかかって家から離れた場所で過ごした時のことを思い出す。Winnicott は、Mark の離乳困難という生育歴を思い出して、母親から引き離された時の悲しみの背後にある母親への愛情について触れている。

Mark は「もし母がいなくなったら、まるで様子が違ってしまいます」と答えているようだった。そして最後の 11 枚目のスクイグルで「奇妙な人間」を書いた Mark に、Winnicott は「彼には帰る準備ができていた」というコメントを残している。Winnicott が何をもって「帰る準備ができていた」と判断したのか、コメントは残されていないが、Mark の描いた人物は、右手をあげて「バイバイ」しているように見えなくもない。

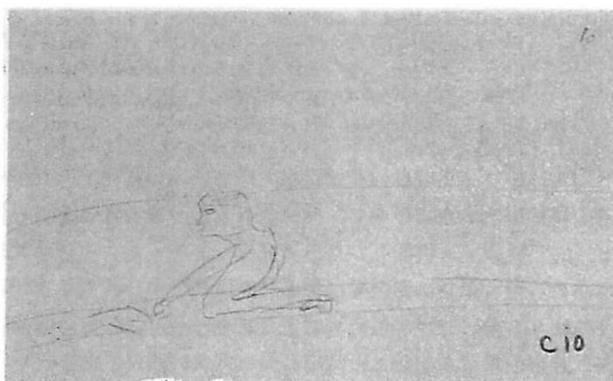


Fig.2 10 枚目のスクイグル

5. 夢と解釈

Winnicott の症例をみると、Piggle にしても Mark についても、子どもたちの力に驚かされるばかりである。そしてこの子どもたちの力を引き出す Winnicott の臨床力にも、私たちは驚かされることになる。

Winnicott は、遊びの深まりによって子どもが夢の水準に到達し、顕在夢に含まれる防衛の要素を扱うことで、患者が繰り返し見ている夢を想起できるように手助けしている。言い換えるならば、スクイグルを交わしあうことを通して子どもの防衛を扱い、思考水準の退行と深まりを手助けし、その果てにあるトラウマ状況を現す夢（スクリーン夢）への到達を援助しようとしている。Winnicott の夢をめぐる臨床は、外傷体験の取扱いとかなりの程度まで一致しているといっていだろう。ここには、先に見た Winnicott 自身の夢を見ることのできないという症状や、Winnicott が職業人生の入口で体験せざるを得なかった従軍体験の影響をみることができるともかもしれない。

そして子どもがこの夢みることに達すると、Winnicott は何も言わず、セッションは終わりを迎えるのである。スクイグルの素材の中に、Winnicott は、子どもの問題が取り扱える形で現れていることに気づいている。スクイグル表現に子どもからの Winnicott への能動的な関与、分析家への希求性を見ていると言ってもいいのだろう。

症例 Mark を例にあげるなら、Mark は空想も夢も活用できずに解離が生じ、これが盗癖という形で行動化されていた。ここからスクイグルを通して、現実と空想の行き来が可能になることで解離が解消され、そして Mark は抑うつ的になっている。Winnicott も述べているが、これは「かなり深層におよぶ精神療法」と言っていだろう。果たされている仕事の質と深さに比べれば、言語的な解釈はほとんど与えられていない。一方で、もしスクイグルを非言語的な解釈として考えられるなら、かなりの解釈である、とも言えるかもしれ

ない。ただし、子どもの治療相談面接に寄せられているのは21症例だが、症例によって交わされているスクイグルの枚数はまちまちである。おそらくこの分量も、ふたりの関係性と Winnicott の関わりの綾を雄弁に物語っている。

晩年、Winnicott は次のような言葉を残している。

最近になってようやく、患者が自然な展開として転移を自分に向けてのを待てるようになり、解釈が自然な発展の過程を疎外することを回避できるようになった。(Winnicott, 1969, p.116)

Winnicott は、個人的なニードにしたがった解釈は患者の変化を妨げることを指摘して、分析家が我慢して待ちさえすれば、患者自身が創造的に理解するという喜びに到達することを妨げずに済むとも述べている。この臨床態度が、Winnicott の夢に対する態度にも透徹している。

解釈することと解釈しないことをめぐる Winnicott の臨床態度が端的にまとめられているのが、Khan による1969年の記述である。

解釈するという行為には、分析家が沈黙を通すことも含まれている。つまり、最近になって Winnicott(1958)や Balint(1968)などが強調するように、設定が抱えること **holding** や存在していること **being** を促進しているような分析作業の領域においては、とりわけ解釈しないことこそが、分析家の貢献なのである。何を解釈しないのかという問いへの答えは、曖昧である。はっきり言えるのは、解釈しないという行為は、単なる受動行為ではないということである。これは先行する出来事によって決まる。このとき、分析設定の中にいるという体験そのものを阻害するような、患者の自我の病理から生じる抵抗が、和らげられ

ている。(Khan, 1969, p.384)

症例を見ると明らかなように、たしかに Winnicott は、単純に受身的に解釈しないだけではない。子どもが分析家に向ける感情を細やかに観察している。もちろん解釈を加えるときもある。遊びと解釈を通して子どもとの関係が深まり転移が醸成していくのを待ちながら、しかるべきタイミングで「夢を見ることはあるか」と尋ねている。子どもとともに転移をくぐり抜け、子どもが夢の世界に入っていくことを支えているようにみえる。

ここにあるのは、分析家の解釈によって、子どもの成長や変化が促されるという考えとは異なる臨床観である。もちろん Winnicott もかなり重要な解釈を与えているし、解釈の重要性を軽んじているわけではない。しかし分析家が何かをもたらすというよりも、子どもの成長力が出現するための手助けとして、解釈(することとしないこと)がある、ということのようにみえる。この臨床観を支えているのは、患者/対象への信頼である。「重要なのは、信じることができるのかということ」という Winnicott の言葉には、患者の生きる/遊ぶ/夢みる力を信じる Winnicott の人生観と臨床態度の本質が含まれているように思う。

しかしさらに Winnicott の臨床をみていると、「対象への信頼」が、ただ子どもに任せておけばよいというものでもないことが浮かび上がってくる。それぞれの症例が到達している洞察や治療的展開は、Winnicott の分析的関与と子どもの力が絡まりあうことでもたらされているようである。この両者を分かちことには困難が伴う。

これは、先に引用した症例 Piggie と Winnicott のやり取りも同じである。たしかに Winnicott の解釈によって展開していくのだが、たとえば英国クライン派の分析臨床に比べると、解釈とその後の連想の展開に直線的帰結を認めるのは難しい。「何やらよくわからないうちに、ふたりは展開している」という方がしっくりくるのである。

ここに示されているのは、「精神分析が大切な作業をしてくれる」という Winnicott の信頼かもしれない。この態度は Winnicott にとどまらず、現代の精神分析家が言葉をかえて指摘するところでもある。たとえば狩野(2011)も、精神分析がもつ自己組織化機能について言及し、精神分析が「生きた有機体」であると指摘することで同様の視点をもっている。

精神分析とは、「分析家と患者が、一定のルール、一定の場所と時間、一定の役割で、意識的・無意識的に相互交流を繰り返し、相互に浸透し、協働しながら自らをオーガナイズする有機体であって、こうしたプロセスそのものにおいて結果が新生する」(狩野, 2011, p.9)

重要なのは、患者への信頼であり、精神分析プロセスへの信頼なのだろう。Winnicott は、自分が何かをするのではなく、子どもが精神分析と Winnicott を活用して、自分で気づいて解決する喜びをつかむためにその場にいつづけた人だったのかもしれない。Winnicott の夢の臨床には、この姿勢が非常によく現れているといえそうである。

したがって、Winnicott の治療面接相談 consultation が短期間で終わるからと言って、これを短期療法の範疇に含めることには戸惑いがある

る。たとえば Davanloo や Malan らは、精神分析の知見を活用した短期力動療法を発展させ、十分な治療効果を上げている。また Fosha(2000)も、愛着と感情についての心理学的・神経科学的な理論を基盤にした体験促進的力動療法(AEDP: Accelerated Experiential Dynamic Psychotherapy)を開発して成果をあげている。しかし、彼らの短期力動療法が、転移を理解しつつも分析家がかかり積極的に介入して面接プロセスを構造化しようとしているのに対して、Winnicott は分析に進展しつつける転移と夢の展開に身を任せており、この点で両者には根本的な違いがある。短期力動療法は、戦略的な心理療法である。しかし Winnicott の実践は、やはり精神分析なのである。あえていうならば「最小限の精神分析」なのかもしれない。

最後に、改めて Winnicott 本人の人生に立ち返ってみたときに、Winnicott 自身が夢を思い出せないという症状をもって精神分析の道に入ったことが、私たちに大きな意味をもって理解されてくる。もしかするとそれなりに重い病理をもっていたかもしれない Winnicott だが、精神分析家としての Winnicott は、精神分析に夢を夢見ることを見出し、人生を生きる支援を実践した分析家として存在しつつけたといっているのかもしれない。

文献

- Abram, J. (1996) *The Language of Winnicott: A Dictionary of Winnicott's Use of Words*. Karnac.
 [館直彦監訳(2006) ウィニコット用語辞典, 誠信書房.]
- Fosha, D. (2000) *The Transforming Power Of Affect: A Model For Accelerated Change*. Basic Books.
 [岩壁茂他監訳(2017) 人を育む愛着と感情の力 AEDP による感情変容の理論と実践. 福村出版.]
- Isaacs, S. (1948) *The Nature and Function of Phantasy*. *International Journal of Psycho-Analysis*, 29, 73-97. [松木邦裕監訳(2003) 対象関係論の基礎—クライニアン・クラシックス. 新曜社.]
- 狩野力八郎(2011) 治療構造論, システム論そして精神分析. *精神分析研究*, 55-3, 1-11.
- Khan, M.M. (1969) *Vicissitudes of being, knowing and experiencing in the therapeutic situation*. *British Journal of Medical Psychology*, 42, 383 – 393.

- Solomon,M.F. et al. (2001) Short-Term Therapy for Long-Term Change. W.W.Norton & Company.
 [妙木浩之・飯島典子監訳(2014) 短期力動療法入門. 金剛出版.]
- Winnicott,D.W. (1935) The Manic Defense. In D.W.Winnicott 1958 Through Paediatrics to Psycho-Analysis: Collected Papers. Basic Books. [北山修監訳(2005) 小児医学から精神分析へ. 岩崎学術出版社.]
- Winnicott,D.W. (1969) The use of an object and relating through identifications. In D.W.Winnicott (1971a) Playing and Reality.
- Winnicott,D.W. (1971a) Playing and Reality. Tavistock Publications. [橋本雅雄・大矢泰士訳 (2015) 改訳 遊ぶことと現実 岩崎学術出版社.]
- Winnicott,D.W. (1971b) Therapeutic Consultations in Child Psychiatry. The Hogarth Press. [橋本雅雄・大矢泰士監訳 (2011) 新版 子どもの治療相談面接 岩崎学術出版社.]
- Winnicott,D.W.(1977) The Piggie: An Account of the Psychoanalytic Treatment of a Little Girl. [妙木浩之監訳(2015) ピグル：ある症状の精神分析的治療の記録. 金剛出版.]

シンポジウム：ウィニコット・フォーラム 2019「今、あらためてウィニコットを知る」

ウィニコットの「失敗論」について

山口大学教育学部 恒吉 徹三

I ウィニコットの『失敗論』について

1. ウィニコットの『失敗論』についての私の関心

そもそも「ウィニコットの『失敗論』」と表現するのは十分とは言えないであろう。ウィニコットの「環境の失敗」(environmental failure)という概念を臨床実践に活用し、面接場面での面接者の失敗を、クライアント理解のきっかけとして活用する発想のこと、というべきかもしれない。けれど、臨床場面での面接者の「失敗」を取り扱う意味が主張されなければ、単なる失敗で、危機的状況に終わることになる。そもそも、面接者が一人で失敗するわけではなく、来談者との関係の中で失敗することに意味を見出すための概念である。たとえば、クライアントが面接者に向かって怒っている時、文句・不平不満などを言っている時に、すぐに意味を見出すことは難しい。そこで、下手をすると、「そんなつもりで言ったのではない」と面接者は弁解し、「それはあなたが悪くとらえ過ぎている」とクライアントの受け取り方の問題(誤解)に帰すことで説得して申し開きをしたくなる。ところが、弁解は事態をより悪くするし、意味があるはずの失敗を意味のないものにしてしまいかねない。とは言え、失敗すればよいわけでもない。

本稿では、面接者とクライアントとの間で避けようもなく起こる「失敗」とその取扱いについて検討する。すでに述べたが、ここで「失敗」と呼んでいるのは、「環境の失敗」のことである。Winnicott (1988/レジメの日付は 1954 年 8 月) は、「環境の失敗という言葉で私が言いたいのは、安全に抱えることの失敗であり、その時点で個人

が持ち堪えうることを超えた失敗のことである。」と述べている。言い換えると、面接者の失敗とは、面接者が、クライアントがその時点で必要としている関わりや対応が、(過去のだれかがうまく対応できなかったのと同じように) できなかったことである。その上で、臨床的に意味ある失敗となるためには、面接場面でクライアントが感じた苦痛を何らかのかたちで面接者に向けて表現することができるか否かである。このような「失敗」の概念を用いることの意味、言い換えると「環境の失敗」の面接関係での劇化について検討する。

なお、この「劇化」という表現は、ウィニコット (1958ab) の *dramatizing* の訳として、北山 (1989/1990) の監訳書で用いられている。第二次世界大戦中に児童疎開のために収容所に収容されていた 9 歳の少年を、ウィニコットは自宅で預かる。この少年は、これまでと同様に何度もウィニコットの家から逃げ出していた。この逃げ出す行為は、「無意識的に家庭の内側 *inside* を守り、攻撃から母親を保護し、同様に、迫害者でいっぱいになっている彼自身の内なる世界から逃げ出そうとしている」ものだとウィニコットは理解していた。その後、「内側への攻撃を劇化 *dramatizing*」し、少年の行動に対応するのに時間を取られ、ウィニコットが不在の時に「最悪の事件」が起きたという。この劇化という表現を用いるにことについて北山 (2007) は、行動化という用語は否定的に扱われてきており、建設的な側面、メッセージ性や演劇的な意味のあることを示されないからだと述べている。筆者は、面接者とクライアントという二者の間で、失敗しようと思図したわけでもないの

に、面接者が失敗することについて、劇化という言葉で表現されるような、メッセージ性があるものとして理解できるかについて検討する。

2. ウィニコットの失敗論を探して迷子になる

ウィニコットの著作には、面接者の失敗とその失敗へのクライアントの反応についての理解の詳細な記述が、あちらこちらに書かれているはずであった。当然のことながら、臨床的な観点から面接者の失敗の取り扱いについて記述されているはずであった。ところが、私が思っているほどに面接者の「失敗」についてのまとまった記述は見当たらない。一方で、「環境の失敗」についての記述は、多数認められた。たとえば、病理の発生モデルとして、特により重篤な心理的な状況として、ウィニコット(1947/1958)は『逆転移の中の憎しみ』において、精神病的な患者の愛と憎しみのアンビバレンスについて述べており、「患者の人生で、最初に対象を発見する本能衝動が生じたときに環境の失敗 *environmental failure* があったことを意味する。」と指摘している。また、早期の段階で赤ん坊への積極的な適応に「環境が失敗」すると、侵襲として自動的に記録され、存在の連続性を妨げる(Winnicott, 1955-1956)ことや、依存の状態と環境の失敗による問題の程度(Winnicott, 1965b)が病理と関わることなどについて指摘している。

では、私の失敗についての理論的な学びが、ウィニコットからではないものだとするとどこから得たものかと考え直してみた。すると、かみくだいてくれる誰かを通じた学び、たとえば北山(1985/2007)が、ウィニコットの臨床について述べている中で、「抱えられた退行状態では病的原因となった環境による被害が再演され、実にもとの環境の失敗に対する反応が克明に再現される時もある」ことを指摘し、さらに、「転移のなかで抱える環境の失敗や待遇の悪いことに対する怒りは、治療者の失敗として、つまり患者の外に原因があるものとして受けとめられ劇化されねばならな

い。」と面接者の失敗について、過去の環境の失敗の転移であり、クライアント以外のところに問題があることが示されることを指摘している。このように、ウィニコットを噛み砕いて理解できるものとして提供している論考である。

さらに、これまでのウィニコット・フォーラムや、ウィニコットの臨床的な失敗論をより展開したCasement(1985,2002)の論考などから学んだものなのであろうか。それでは、単なる受け売りで終わり、自分自身が見出したウィニコットの発想だとは言えない。ここで、私は迷子になった。私の考える面接者の失敗とその取り扱いについての理論(これを失敗論と呼ぶことにする)が、文献の中には見つけられなくなったのである。筆者が、ウィニコットの著作の中に面接者の失敗論をまとまりある論考として見出せなかったのは、単なる文献検索の失敗ではないか、という指摘もあるだろう。単なる検索の失敗で何ら意味もない迷子の感覚であるのかも含めて、以下で検討する。

II ウィニコットのいるところ：面接室のウィニコット

1. 自分なりにウィニコットの価値を見出すこと

ところで、ウィニコットはどのように講義しているのだろう。例えば、人間の発達と成長についての講義(1936年～ロンドン大学で幼児教育のベテラン教師対象、1947年～社会福祉大学の学生対象)について、クレア・ウィニコットは次のように述べている。

「ウィニコットの講義内容の伝え方は独特のものであった。それで学生たちは年を追うごとにノートを取ることを諦めて、ウィニコットに巻き込まれて実際に成長し発達するプロセスを選ぶようになった。」「教えられることなく学んだ」「学生たちが取ることができなかったノート」(『人間の本性』の序文：クレア・ウィニコット；1945年に最初のタイプ草稿、1971年他界、1988年刊行(館

による解題)。

つまり、ウィニコットの講義(話・文章)は、ノートに書き写すような知的に整理して理解を得ようとする感覚だけでは、とらえられない内容を含んだものであり、言葉通りに聞き取るような正面からではない聴き方が必要であったと考えられる。このことは、Casement, P. (1990)が、自身の前著で、ウィニコットを「再発見すること」(re-finding Winnicott) についてのはっきりとした一例を示したことを指摘しているように、ウィニコット考えをそのまま受け入れることでは十分ではない。ケースメント(1985)は、ウィニコットの舌圧子の論文から「ためらいの時期」に言及した上で、このためらいによって作り出される空間がなければ、分析的な発見もあそびの余地もなく、ためらいによって生み出される空間があれば、理論は再発見されて新しくなる余地があると指摘している。それぞれのウィニコットを見つけ出すことの重要性はこれまでも指摘されていることであるが、本稿でも筆者の視点からのウィニコットの失敗論について描き出す必要がある。

補足であるが、Casement を翻訳した松木(1991)も矢崎(1995)も、mistake は「あやまち」と訳し、failure は「失敗」と訳している。筆者は、日本語の失敗という語の感覚が、臨床的な場面での面接者とクライアントの間で生じる現象に合っていると考えて用いている。ところが、過ちというほどの重さがないという印象を「失敗」という表現から受ける場合もあると考えられるが、実際の臨床場面で「失敗した」と面接者が感じている状況は、とても軽いと言えるものではなく、抱えるのに困難なほどの重さを持つてのしかかってくるものであることも踏まえて「失敗」という言葉を用いていることを述べておきたい。

2. ウィニコット(1965a)のボブの事例

ウィニコット自身の失敗についての理解をみるために、ウィニコットの事例を通してとらえることにする。そこで、ウィニコット(1965a)が「抱

える環境」の失敗として取り上げている「ボブの事例」をここでは取り上げて、失敗の概念について検討する。

ボブは、6歳の男の子で、来談した時には、短く詰まった言葉で話すので、話のほとんどが理解しづらい状態にあった。家族は、技師の父親、母親、養女に出された姉(15歳)、弟(5歳)、弟(1歳)であった。また、ボブは幽門狭窄であったことから母親による授乳は困難で、生後2週間で手術を受けて2週間入院した。ボブが、14か月~16か月ころ、母親が眠り込むようになった後にボブのパニック発作が出現している。2歳6か月には、泣き続けるので小児科を受診している。欲求不満の状態にあり、発達は6か月遅れであることから知的障害になる可能性があると言われ、医師から指摘されている。3歳になっても話せないことから、3歳6か月の受診時には知的障害と診断されている(IQ=93)。家でも学校でもペニスを出す行動のあったことも報告されている。4歳9か月のとき扁桃腺摘出手術で辛い思いで入院していた。

ここでは、ウィニコットとボブとの間で行われたスクイグルの中から、「失敗」について言及している「スクイグル9」と「スクイグル26」を取り上げる。その際、図は提示せずに文書により説明する。

「スクイグル9」には、「父親の持ち分での失敗」という言及がなされている。縦に長く、楕円に近いような形態で、左下方向に向かって口が開いている。けれど、「波打っている線」で描かれ、「回行道」「迷う場所」と表現され、ウィニコットは「迷路」と捉えている。そしてボブは、「恐かった、父親と行った」と不安気に語ることが指摘されている。そこでウィニコットが、「環境の失敗、父親の持ち分での失敗」だと理解する。これにより、ウィニコットは、「おびやかされた混乱状態で、潜在的な失見当識のボブに触れる」ことになり、「自然治癒する子どもの統合失調症という考えがD.W.W.に浮かぶ」。すでに述べたことだが、ウィニコット

(1947/1958) は、精神病は、「患者の人生で、最初に対象を発見する本能衝動が生じたときに環境の失敗 *environmental failure* があったことを意味する。」ものとして位置づけ、「普通の環境提供とその維持」が重要だと述べている。つまり、ないものをこちらから提供する必要性のある状態として捉えており、スクイグル 9 も空洞のような形態が描かれており、迷路の中をさまようような不安感、辿り着くべきところがわからない、という混乱の度合いの強いことを指摘していると理解することもできる。

筆者が特に言及したいのは、「スクイグル 26」についてである。このスクイグルは、枠内いっぱいのサイズで、人が一人立っているように描かれている。人の頭部(上部)は波打った線であり、目は黒く塗りつぶされている。胴体は丸く、胸部から腹部にかけて、子どもを抱き抱えている。この子どもは、縦線で黒く塗りつぶされている。さらに、足のあたりに、簡略化されて描かれた子どもがウィニコットによって描き加えられている。

実際のスクイグルの最中のウィニコットとボブとのやりとりは以下のようなものである。ウィニコットは、赤ん坊を描いて「落とされそう」と言う。すると、ボブが目を塗り潰して「眠り込むんだよ」と言う。ウィニコットは、赤ん坊を抱える母親の脱備給だと理解している。さらに、ウィニコットは、赤ん坊を床に降ろす。するとボブが、「お母さんが目をつぶったら魔女がきた」ので「ぼくのお母さんがつかまえるぞ」、「パパが小さなナイフで魔女のおなかを刺した」とボブが言う。このスクイグルについて、ウィニコットは、母親の抱える機能の失敗による精神病的な不安だと理解し、ボブが 14~16 カ月のときの母親はうつ病で、眠り込んでいたこととのつながりが表現されているものとして理解される。

このスクイグルの過程について考えてみると、母親が赤ん坊を見ていることは、見守ることである。しかし、ボブは目を塗りつぶして眠っている

ことにし、赤ん坊を見ていないことを、ウィニコットは、赤ん坊を床におろすことで、より明確に、抱えることができていない母親、つまり外的環境の問題があることをボブにはっきりと示して二人で共有している。

3. 環境の失敗がボブに与えた影響：ウィニコットのコメント

ウィニコットは、ボブに対する環境の失敗の影響について、次のように述べている。絶対的な依存の段階での環境の失敗は、想像を絶する不安を生み出し、この不安に対して高度に洗練された防衛組織として、統合失調症、重度の学習の困難をもたらすという。また、外傷的な出来事をめぐる複雑な組織化について想起されたことで、忘れることのできる素材へと変更されたことについてもウィニコットは指摘している。

つまり、ウィニコットは、スクイグルを通してボブに生じた環境の失敗を読み取り、子どもの不安を言語化するといった、環境の失敗を表現して自ら取り扱う場を提供していると考えられる。言い換えると、スクイグルは、過去の環境の失敗を、面接者とクライアントが同じ空間の中に描き出す作業を通して理解できるものであることを示している。この過程において、失敗は養育者によるものであることを、ウィニコットが赤ん坊を床に降ろすことによって、ボブの目の前でして見せたと理解できる。

しかしながら、ウィニコット自身が失敗しているわけではなく意図的にして見せている点が、筆者が示そうとする失敗論とは異なっている。

III ウィニコットからケースメントへの失敗論の展開

1. 環境の失敗の反復としての面接者の失敗

ウィニコットの失敗論は、すでに述べたように「失敗論」としてまとまって論じられているわけではない。面接場面の設定の中での退行や、転移

や逆転移について論じる中で、面接者の失敗の意義やその取り扱いについてより詳細に論じられている。

まず、ウィニコット（1954）の『精神分析的設定内でのメタサイコロジカルな臨床的な側面』において、面接者の失敗をクライアントが使う前提について述べている。面接者がクライアントに適応する段階がまずあり、この適応の段階を経た後に面接者は適応に失敗する。適応の最中に面接者の失敗が生じることにより、過去の失敗や外傷が再現され、かつての失敗状況で凍結されていたことが面接場面で生じることを示している。さらに、このような過程に意味があるのは、かつての失敗状況で将来的に解凍されることを期待して、健康な自己の防衛として失敗状況が凍結されていたというとらえかたである。つまり、ウィニコット（1954）が指摘しているのは、失敗が生じる前提として面接者がクライアントに適応すること、その上で面接者がクライアントとの関係の中で失敗し、過去の出来事を現在の関係の中での出来事として取り扱うことができるようになるということである。

さらに、ウィニコット（1955-1956）が、『転移の臨床的諸相』において、失敗について述べている点を、多少長くなるが以下に要約する。環境の適応がほど良くないこと、つまり、一連の適応の失敗が生じた場合、この失敗に対する無数の反応の集積が、まがいの自己pseudo-selfへと発達する。さらに、面接場面での面接者の失敗と、その失敗を面接者がどのように捉える必要があるかについても述べており、クライアントは面接者の失敗を利用するので、失敗は、なければならぬものであると指摘している。この面接者の失敗を、クライアントが利用し、面接者は、この失敗を過去の失敗として取り扱う必要がある。その際には、面接者の失敗に対して、クライアントが怒ることができるようになるのに必要な面接者の振る舞いについても述べている。それは、面接者自身が自分

の失敗を利用できることであり、面接者は自分自身を守ろうとする振る舞いを避ける必要性があることを指摘している。これは、初めて怒りを表出できる機会、すなわち、クライアントが、過去の失敗について当時はできなかった怒りを対象に表出する機会を提供するためにも必要な態度である。もし、面接者が自分を守ること必死になってしまうと、過去と同様に怒りを抑圧するという帰結に至ることを指摘している。

つまり、ウィニコット（1955-1956）が指摘しているのは、過去の関係の失敗として今ここで生じた失敗を弁解することなく位置づけることである。さらに、「“神経症”の分析の陰性転移が治療者の失敗についての客観的な怒りに置き換えられる」というように、「客観的な怒り」であって、不合理な怒りの表出ではないという指摘は重要であると考ええる。筆者の言葉で言い換えるなら、「もっともな怒り」であり、「当然の怒り」である。この正当な怒りの表出は、かつてクライアントが怒りを表出することもできずに凍結した環境の失敗を、面接者の失敗に対する当然の怒りとしての表出という意味があると唱える理論だと言える。

ここに至って、ウィニコットの失敗論とその面接場面での取り扱いの議論が明確に取り上げられているところに出くわすことができた。つまり、ウィニコットは、「面接者の失敗」や「失敗」という枠組みからトップダウンに現象を見ているのではなく、面接場面での実際的な現象から「失敗」を論じているために、まとまりある章や見出し、著作のタイトルとしては見出すことができなかったと言える。臨床実践に根ざして積み上げられた発想であり、ボトムアップの理論構成であると言える。そのため、大見出しからでは、簡単に見つけることが難しく、筆者は迷子になったという感覚を抱いたものと理解できる。しかしながら、これでは、まだウィニコットの言っている失敗論を、ウィニコットの著作の中で見つけたにとどまっている。さらに、検討する必要がある。

2. 面接者の失敗論のさらなる展開

ウィニコットの失敗論について、臨床実践に根ざしてより一層展開したのは Casement (1985) である。その際、クライアントと面接者の共同作業としての臨床実践であることをより強調している。例えば、「ところの中のスーパーヴィジョン」internal supervision (松木訳) という概念についてみると、クライアントから無意識の助言が発せられており、クライアントは面接者の状態を感知して反応し、面接者の仕事のすすめかたの変化もクライアントがモニターしている。そのため、面接者は、クライアントの反応に耳を傾けることが大切であり、クライアントの反応は、面接者の理解を導くものであることを指摘している。つまり、クライアントからのメッセージを手がかりとして、面接者がクライアントの理解を深めていくための概念であり、関係の中でクライアントの心的世界を理解することを、「患者から学ぶ」と表現することでより明確にしているということができる。

さらに、「患者から学ぶ」ことは、それほど簡単なことではないことが、Casement (2002) が、クライアントによる無意識の批判として以下の4つをあげていることから理解できる。①面接者を批判する代わりに他者を批判するという「置き換えること displacement による無意識の批判」、②面接者ではない他の人物がうまくやっているという「対比 contrast による無意識の批判」、③面接者の失敗をクライアントが取り入れて、自分自身を責めるという「取り入れ性の言及 introjective reference による無意識の批判」、最後に、④面接者が過去に話をそらしたのと同じようにクライアントも話題を変えることで、つまりは模倣することで、面接者のことをクライアントが「映し出すこと mirroring による無意識の批判」を挙げている。

このような批判は、面接者が十分ではないこと、ある意味ではクライアントとの関わりにおいて面接者が実際にも失敗していることを、クライアン

トが面接者に批判という形式で伝えているものと理解できる。より細かく述べるなら、面接者は、実際にもクライアントのことを理解できていない点がある点では、批判されて然るべきとも言える。しかし、単に批判しているのではなく、面接者が理解すべき点のどこを理解していないのかを、明示しているという理解が面接者に必要である。

このような、面接者が失敗することで分析という臨床的な作業に成功するという貴重な知見を最初に見出したのは、Winnicott (1963) の『育児、保育、および精神分析的設定のなかでみられる依存』においてであることを、Casement (2002) が指摘している。この論文には、「失敗」という表現がいくつも用いられている。例えば、「患者が不測の事に反応して連続的な生の営みの中断を被るのは、わたくしたちがこの側面で失敗した時である」、「そして親の失敗をその結果おきた子どもの病気の臨床状態と関係づけることから、何をすべきかを学ぶことができるのである」など。さらに、「患者が分析医の失敗を、それも極めて小さな失敗を活用することである。恐らく、その失敗も患者が仕組んだものに違いないのである。」と述べ、面接者の失敗は、クライアントとの関わりの中で生じ、この失敗をクライアントが活用することで意味あるものとなることを指摘している。その上で、クライアントは生育史に裏うちされたやり方で面接者を失敗させることができる段階まで、育儿的、保育的な側面で失敗するわけにはいかないことも指摘しており、失敗してはならない時期（発達的に言えば絶対的な依存の時期）があつて、その後失敗することで意味あるものとなるという理解も提示している。

このようなウィニコットの理解を例に挙げた Casement (2002) は、面接者がクライアントを失望させまいとしている最もピークの時に、そそっかしく、または、不注意にもなって、クライアントを失望させるという、「不思議な事実」について述べ、この出来事がどのようにして分析にとって肯

定的な分岐点になるかについて事例を元に検討している。この事例は2度の分析を受けており、1度目の分析では、かつて養育者が提供できなかったことを面接場面で面接者が提供できたことによる変化（修正情動体験）と言えるような過程が記述されている。再度来談した2度目の分析では、カウチの設定を別の来談者のスタイルにしていたことから面接者があたふたし、面接室の他の設定もいつもと異なっていたことが、翌日の面接でクライアントとの間で話題になり、かつての養育者とクライアントの関係での出来事が、面接者が意図したわけではなく誤って再演（re-enactment）されたものだと理解されている。Casement (2002) は、Winnicott (1965b) の面接者が失敗することで、「患者のやり方についていけないことによって成功を収めることになる。これは単純な修正体験による治療理論とはずいぶんかけ離れたものである」ことについて、面接場面での細やかな観察と事例の記述を通して再検討し、面接者の失敗の意味を示している。

IV 筆者がたどりついたところ：失敗の現実的側面と劇化としての側面

1. 面接者の失敗に臨床的な意味を見出すこと

ところで、臨床場面での面接者の失敗について考えるときに、面接関係での劇化としてとらえることができる失敗であるのか、それとも単なる失敗、現実的な失敗であるのかは、すぐに判断できるものではない。面接過程で面接者が失敗の意味を考え続けた結果、やっとその意味を見出すことができるものと言えらる。つまり、失敗してすぐにその意味が理解できるわけでも、意味がすぐに生じるのでもなく、ある経過の中でやがて見出すことができるものであると考えられる。本稿では、このような失敗の概念の臨床的な意義について検討してきた。もちろんのこと、面接者の失敗の全てが意味あるものとも言えない。むしろ、意味あ

るものとなるか、ならないかの違いだと言えるかもしれない。

それでも、クライアントとの関係において、クライアントのタイミングに合った面接者の失敗は、クライアントがこれまで凍結してきた怒りを表出する機会として使うことができる。そのためにも、面接者は無用な弁解をして、この失敗の現実的な側面だけを扱わないでいられるかが分かれ目となると考えられる。まずは、面接者が失敗したことについて、クライアントから攻め立てられること、怒りをぶつけられること、場合によっては、Casement (2002) の事例のように、あからさまな怒りではない形で灰めかされる批判に、しばらくの間、耐える必要がある。

2. 面接構造の違いと失敗の現実性の程度について

ここで、これまで取り上げてきたウィニコットや Casement の面接構造と、筆者の面接構造の違いを踏まえて検討する。

筆者は、対面法（主に90度法）の位置での面接を行っている。週4回の背面法の位置での自由連想法による精神分析と比べると、毎週1回の対面法の位置での力動的なアプローチでの面接は、面接者の失敗がより現実味を帯びていると考えられる。現実的な意味でもクライアントが指摘するように、至らない部分がよりいっそう含まれているということができる。そのため、クライアントが怒ることはもっともであり、批判めいた話が出たり灰めかされるなど、単なる失敗にしか思えない可能性もある。しかし、この面接者の対応に、至らない部分があることにより、クライアントの過去の環境の失敗という抑圧されてきた苦痛な体験を、「今ここで」の転移として劇化しているのであり、面接場面で取り扱う可能性が開かれる。その際、面接者は、自らのしでかしたこと、行き違っている現実的な状況について、過去の反復としての可能性、つまり失敗がここで生じている意味を考えることで、失敗に意味があるのかないのかの判断をしばらく保留することができる。保留するこ

とにより、失敗を、その場しのぎ的に取り繕わないで済む。下手な取り繕いは、よりいっそう現実的な怒りだけを喚起しかねない。目の前にクライアントがいて、あからさまに怒りをぶつけられる場面で失敗の意味を考え続けるには、自らの中に考えるための空間を確保するだけではなく、少なくとも失敗には意味があるという理論の支えが必要である。ここに、ウニコットの失敗論と筆者が呼んでいる発想が生きてくる。失敗論をもとに、クライアントと関わりながら、面接者自身の中に生じる反応(感情)について考え続けることは、通常の面接と同じことだと言えるが、凍結していた強烈な怒りがいきなり解放される場面では、それほど簡単なことではない。逆に仄めかされるような形式の場合では受け流してしまうという危険性のあると同様に、この簡単なことではない状況の中で考えることによって、かつてクライアントが体験した周囲の環境の失敗が、どれほどのものであったのかを実感として面接者が体験する機会が与えられる。かなりの時間をかけ、考え続ける中で見出した理解を、面接者が自らの失敗を通して感じ取っている痛みなどの感情をもとに、クライアントの痛みとして実感を持って伝えることができれば、意味ある失敗となりうる。しかし、この作業は一度で終わるものではなく、何度もやりとりを続けながら、最後に行き着くものだと考えられる。

つまり、面接者とクライアントとの関係が十分に作られた後の面接者の失敗は、クライアントの怒りに圧倒されながらも、その怒りに含まれている意味を面接者が考え続けることで、意味を見出すことを可能にするものだと言える。その際、毎週1回の対面法(90度の位置)の面接では、面接者の失敗は、現実的な失敗としての側面が際立ち、劇化として理解する事ができる一面は捉え難い可能性がある。そのため、いくら考えようにも考えることさえ困難となり、意味はそうそう出てこないことになる。言い換えると、面接者の現実的な

失敗に、過去の失敗が重ね合わせられて生じている失敗とも言える。そのため、ウニコット(1965b)が「極めて小さな失敗を活用する」と指摘しているように、面接者の現実的な失敗の大きさに比べてあまりに大きな怒りが向けられる場合には特に、過去の失敗が凍結されていたものが、面接者の失敗を契機に解凍され、表現されている可能性についても想定しながら対応する必要があると考えられる。

ここまでウニコットの失敗論について述べてきた。ウニコットの失敗論以上に、現実的な失敗についても否定せず、その上で、劇化としての面接者の失敗の意味を見出すために考え続けること、そしてクライアントから向けられた怒りへの面接者の反応(感情)もクライアント理解に活かしながら考えるという、ある面については面接の基本的な側面とも言えることが、筆者がたどりついた地点である。

さいごに

筆者がたどり着いた地点をあらためて振り返ると、ウニコット(1958b)の中に所収されている『精神病と子どもの世話』(1952)ないしウニコット(1971)の『移行対象と移行現象』の議論の中に示された移行対象の図を想起させる。つまり、面接者の失敗は、面接者とクライアントの間に、クライアントにとって必要なタイミングで、ある意味では移行対象のように現れるものであり、面接者の現実的な失敗なのかクライアントの生活史に沿って生じた失敗なのかと問うものではなく、この面接者の失敗を、二人の間でまずは共有し、面接者の失敗の意味を二人で考えていくと言う協同作業をすることによって、意味あるものとなっていく、と理解することもできる。二人の間で意味あるものとなった時には、過去に「凍結」されていたことが溶け出して、言葉にして取り扱うことができる形となったということができる。

つまり、本稿は、面接者の一方的な失敗というよりも、面接者とクライアントの「間」に必然的に生じるものとして、失敗を位置づけて論じたものである。

[追記]

本稿はウィニコット・フォーラム大阪 2019 のシンポジウムでの発表に、加筆・修正したもので

す。なお、当日は、ウィニコットの失敗論の臨床的意義を示すために臨床心理事例の概要を提示しましたが、本稿では、ウェブ掲載であることを踏まえて割愛しました。なおこの臨床心理事例は、シンポジウム当日にも示した通り、日本心理臨床学会第 33 回秋季大会において、臨床心理面接経過そのものに焦点を当て発表したものです。

文献

- 1) Abram, J. (1996) : *The language of Winnicott: A Dictionary of Winnicott's Use of Words*, London : H. Karnac. 館直彦 (監訳) (2006) : ウィニコット用語辞典, 誠信書房.
- 2) Casement (1985) : *On Learning from the patient*, London : Routledge.
- 3) Casement (1985) : *On Learning from the patient*, London : Routledge. 松木邦裕 (訳) (1991) : 患者から学ぶ : ウィニコットとビオンの臨床応用, 岩崎学術出版社.
- 4) Casement, P. (1990) : *Further Learning form the Patient*, London : Routledge.
- 5) Casement, P. (1990) : *Further Learning form the Patient*, London : Routledge. 矢崎直人 (訳) (1995) : さらに患者から学ぶ : 分析空間と分析過程, 岩崎学術出版社.
- 6) Casement, P. (2002) : *Learning from our Mistakes : Beyond Dogma in Psychoanalysis and Psychotherapy*, East Sussex : Bruner Routledge.
- 7) 北山修 (1985/2004) : 改訂 錯覚と脱錯覚 : ウィニコットの臨床感覚, 岩崎学術出版社.
- 8) 北山修 (2007) : 劇的な精神分析入門, みすず書房.
- 9) Winnicott, D. W. (1958a) : *Collected Papers: Through Paediatrics to Psycho-Analysis*, London: Tavistock Publications Ltd. 北山修 (監訳) (1989) : 小児医学から児童分析へ, 岩崎学術出版社.
- 10) Winnicott, D. W. (1958b) : *Collected Papers: Through Paediatrics to Psycho-Analysis*, London: Tavistock Publications Ltd. 北山修 (監訳) (1990) : 児童分析から精神分析へ, 岩崎学術出版社.
- 11) Winnicott, D. W. (1965a) : *A Clinical study of the effect of a failure of the average expectable environment on a child's mental Functioning*. Int, J. of Psychoanalysis, 81-87.
- 12) Winnicott, D. W. (1965b) : *The maturational Processes and the Facilitating Environment*, London: The Hogarth Press Ltd. 牛島定信 (訳) (1977) : 情緒発達の精神分析理論, 岩崎学術出版社.
- 13) Winnicott, D. W. (1971a) : *Therapeutic Consultation in Child Psychiatry*, London: The Hogarth Press. 橋本雅雄・大矢泰士 (訳) (2011) : 新版 子どもの治療相談面接, 岩崎学術出版社.
- 14) Winnicott, D. W. (1971b) : *Playing and Reality*, London: Tavistock Publications. 橋本雅雄 (訳) (1979) : 遊ぶことと現実, 岩崎学術出版社.
- 15) Winnicott, D. W. (1988) : *Human Nature*, London: Free Association Books. 館直彦 (訳)・牛島定信 (監訳) (2004) : 人間の本性 : ウィニコットの講義録, 誠信書房.

シンポジウム：ウィニコット・フォーラム 2019「今、あらためてウィニコットを知る」

テディベアは、移行対象ではない。

ひょうごこころの医療センター 増尾 徳行

I はじめに

今回のシンポジウムのテーマは、「今、あらためてウィニコットを知る」というものになっています。フォーラムでこのテーマが選ばれた歴史的背景について、少し思い起こしてみました。Winnicott が日本に紹介されてから、40年以上が過ぎました。私たちはずいぶん長いあいだ、彼の思索に触れていることになります。そのなかで、さまざまな理解の深まりや臨床的知見が積み重ねられてきました。その今、あらためて Winnicott を知るのに、私たちはどこから始めたらいいのでしょうか。少なくとも今ここで私は、何を知らうとするのがいいのでしょうか。

いろいろなことを考えたり思い出したりして、私は移行対象をとりあげることになりました。これは、私たち誰もが知っている Winnicott の概念とします。そして、彼がキャリアの中期から晩年まで探究した概念でもあります。彼が亡くなった1971年の著作である『遊ぶことと現実』は、ここにいる私たちのほとんどが、手に取ったことがあると思います。序文の冒頭で彼は、「この本は、私の論文「移行対象と移行現象」(1951;ただし出版は1953年)の発展である」と明言しています。つまり彼は、移行対象について、20年考え続けたわけですね。

『遊ぶことと現実』は、たしかにこの論文の発展形と言えるものです。序文で先のような著作紹介があり、「移行対象と移行現象」論文が提起されます。それから、さまざまな観点が論じられていきます。最後に、短い要約による Tailpiece で終わります。そうして著作全体が、移行対象を主題に

した論考の集成になっているのです。

このフォーラムは20年前に始まり、国内における Winnicott 理解深化の一翼を担ってきました。先輩がたがさまざまに、このフォーラムの内外を通じて、彼を論じてきました。もちろん移行対象も、繰り返したりあげられてきたものです。彼がこの概念の推敲にかけたのと同じ年月を経て、この概念について改めてとりあげることで、このフォーラムから私がどれほど学んだのか、学べていないのかを示す機会にはなるでしょう。それによって私たちが、「今、あらためてウィニコットを知る」のに、ひとつの論点は提供できそうに思います。

それでタイトルを、「テディベアは、移行対象ではない」にしました。それは、つぎのような経験に根ざしています。

15年前、私は大学院を出たばかりでした。大学院で初めて読んだ精神分析家の著作が、偶然にも『遊ぶことと現実』でした。通読して、なんとなくわかった気になっていました。精神分析のセミナーにも、参加するようになりました。そこで、移行対象の一例としてテディベアが挙げられるのを、何度か耳にしたと記憶しています。そして、そのようなものだと理解していました。

それから数年が経ち、私はまじめに Winnicott に取り組むようになりました。2010年くらいから、ウィニコット・フォーラムにも参加するようになりました。結局ほかの分析家の話よりも、彼の語る自分の肌にあう感じがしたのです。

そのようにのめり込んでいくうちに、テディベアは移行対象ではない、と彼が主張しているよう

に、私には読めてきました。勉強し始めたころの認識は、私の勘違いだったのだろう、と考えることにしました。著作を読み直していくうちに、移行現象は内側と外側のあいだにあるのではない、とも思うようになりました。そしてそう捉えるほうが、臨床感覚に合う気が今ではしています。

ときどき私は、大学や職場で、精神分析を勉強している人に出会います。おりを見て私は、「テディベアは移行対象ではない、よね?」と尋ねてきました。すると多くの人は、意図をつかみかねるといような、困惑した表情を浮かべました。彼らは、テディベアは移行対象の一例である、と考えていたのです。やはり今でも、そう聞こえてしまうのでしょうか。あるいは、私が誤解しているのでしょうか。それで、彼の論考をこの機会に再読しよう、と考えたのです。

II 移行対象と移行現象

Winnicott (1971a) は「移行対象と移行現象」という論文のなかで、この概念についてつぎのような説明をしています。

私は経験という媒介となる領域を指すのに、「移行対象」そして「移行現象」という言い方を取り入れた。それは親指とテディベア、口唇エロティズムとほんとうの対象関係、原初の創造的活動とすでに取り入れられたものの投影、恩義を受けているのにはじめ気づかないことと、それがあると知る（「ありがとう」と言う）こと、それぞれ両方の性質がある。

(Winnicott, 1971a: 2-3)

彼は、6万ケースの母子をみたと言われることがあります。彼の慧眼は、赤ん坊が外的対象をさまざまに取り扱う様子から、赤ん坊の**経験**という領野を見いだしたことにあろう、と思います。それがこの一文に、凝縮されています。

Winnicott はパラグラフの冒頭で、経験が、内的なものと外的なものの媒介になることを示します。この点の説明については、いったん保留しておきます。次のセクションで、ここに戻ることにになります。

Winnicott はそこから、この領域について4つの例を挙げています。

親指は身体の一部、つまり Winnicott の言う自分 Me です。その一方で、テディベアは自分でないもの Not-Me です。にもかかわらず、経験においては、それら両方の性質があります。

赤ん坊がおっぱいを吸っている光景を、思い浮かべてみてください。そこには口唇エロティズムという、赤ん坊自身の欲動放散のためにおっぱいという対象が存在している、という欲動論的文脈があります。その一方で、赤ん坊という主体と、母親という対象との関係という対象関係論的文脈があります。経験においては、それら両方の性質があります。

その同じ光景において、赤ん坊は空想のなかでおっぱいを創造しています。これは、将来的に脱錯覚していくことになる赤ん坊の万能感の現れです。その一方で赤ん坊は、外界からすでに取り入れられていたおっぱいという表象を、母親のおっぱいに投影もしています。経験においては、それら両方の性質があります。

また同じ光景において、母親はおっぱいを提示することで、赤ん坊によるおっぱいの創造に寄与しています。しかし赤ん坊は、そうした寄与を受けていることに、気づかないでいます。(赤ん坊にとってそれは、自身が創造したものだからです。) その一方で赤ん坊は、実際に母親からおっぱいを与えられていることを知ってもいます。経験においては、それら両方の性質があります。

これら4つの対になる句は、赤ん坊の内側で起こることと、外側にあるものや外側のものとの関係が組み合わせられていることに、気づかれるでしょう。移行現象は、それらを媒介する領域にあります。

そしてこれら両方の性質があるから、媒介となりうるのです。

そのうえで Winnicott は、この論文の別の箇所でも、つぎのように述べました。

移行対象は、内的対象ではない - それは所有である。それなのに外的対象でもない。

(Winnicott, 1971a: 12-13)

移行対象には両方の性質がある、と述べたあとにくる部分で、それは内的対象・外的対象のどちらでもない、という言及です。両方の性質がありながら、どちらでもない。ただこれは、移行対象の特徴は説明しているかもしれませんが、その特質を説明していません。するとこれらのあいだに挿入されている「所有」が、移行対象としての性質をもたらすのに、重要な寄与をしていそうです。

III 「所有」ということ

実は、先のセクションで挙げた移行現象の説明は、論文の「最初の所有」という節に現れます。そこで、経験というものが、自分と自分でないもの、つまり内的・心的現実と外的現実の媒介となっているという言明が、彼によってなされています。先ほど保留にした、「経験という、内的なものとの外的なものとの媒介となる領域」は、この部分に呼応しています。この叙述が「最初の所有」に現れるのは、理由があります。

そもそも、この論文の 1951 年版には、「最初の私でない所有についての研究 A study of the first Not-Me possession」という副題がついていました。その脚注で、彼はここで用いられる単語は「所有 possession」であって「対象 object」ではない、と注意を喚起しています。つまり移行対象論文は、「最初の私でない**対象**についての研究 A study of the first Not-Me object」**ではない**のです。彼によれば、最初の私でない対象は、おおむね乳房です。

彼の論点は乳房の**所有**にあり、乳房という**対象**ではありません。

Oxford Learner's Dictionary を見ると、この possess ということばは、あるものに強い影響を及ぼして、その考え方やふるまい方を支配する、という意味を持っています。そこから、取り憑く、乗っ取るという意味も派生します。辞書にある例文だと、“She was possessed by the Devil.”すなわち、「彼女は悪魔に所有された＝取り憑かれた」です。この状況は、その女性はその女性でありながら、言動は彼女に取り憑いた悪魔そのものであるわけです。

赤ん坊が乳房を創造するとき、赤ん坊はその乳房を乗っ取っている、とも言える状況です。つまり、赤ん坊は乳房を創造したのであり、それに強い影響を及ぼし、乳房の考えることやふるまいを支配している、ということです。それゆえこの乗っ取った乳房は、赤ん坊にとって自分でないもの Not-Me でありながら、所有である＝乗っ取っているために、自分 Me でもあります。つまり、両方の性質があるのです。

こうしたことが、主観的な経験において起きています。そしてこのことを、Winnicott は移行現象・移行対象と呼びました。このようにして、経験という領域は、内的・心的現実と外的現実の媒介になっています。そして所有というありようは、赤ん坊の経験に属することであるために、内から外という空間上のスペクトラムには、位置づけられません。

つまり移行現象・移行対象について論じるということは、自分と自分でないものあいだ、内的対象と外的対象のあいだとは、異なる概念・領域の話をしていることになります。このことを彼は、*Tailpiece* において「概念と知覚のギャップ」(Winnicott, 1971c: 204) と表現したのだと思います。

赤ん坊は、主観的・概念的の世界に生きている状態から、客観的に知覚できる世界へ参入します。

ここにあるギャップは、空間的なものではありません。テーブルに置いてあるリンゴを「1つ」と捉えるような、知覚による認識から概念的理解への跳躍があります。このギャップに彼は着目し、それを媒介するものとして、経験という領域を見いだしたわけです。つまりこれは、彼独特の現象学的なアプローチなのです。

ここから彼は、つぎのような言明をすることになります。

私が指しているのは、小さな子どものテディベアや幼児が初めて握りこぶしを用いることそのものではない、と理解してほしい。私は対象関係における初めての対象を特に研究しているのではない。私は初めての所有、そして媒介となる領域（それは主観性と客観的に知覚されるもの、両方の性質がある）に関心を持っている。

(Winnicott, 1971a: 4)

テディベアは、外的対象であり、自分でない Not-Me ものです。しかし経験においては、私たちはそれを所有する／乗っ取ることで、自分のものとし、それは、内的なものとの両方の性質があり、両者を媒介しています。にもかかわらず、経験という領域で起きている現象であるために、移行対象は、内的対象でも外的対象でもありません。つまり、**テディベアそのものは、移行対象ではない**のです。

テディベアは、私たちの経験に対して、客観の側から寄与するものです。そして主体である私たちは、経験に対して、主観の側から寄与しています。そして、テディベアをめぐる私たちの経験のなかに、移行対象はあります。

それゆえ、

「これはあなたが思い描いたの？ それとも外から示されたの？」・・・このような質問すら、

作り出されるべきでない

(Winnicott, 1971a: 17, 強調は原著者)

のです。問いの持つ、対象の属性を内側か外側か、そのどちらかに帰属させようとする圧力によって、媒介となる領域は消え失せてしまうからです。この焦点について、あるセラピーに現れた夢の対比を通じて、その感覚が伝わるよう試みることにします。

IV 臨床素材

提示する事例は、ある空想が実現してしまうのではないかと悩まされて、相談機関にやってきた40代の女性です。アセスメント面接中に心理検査も行ない、思考のありようが精神病水準の具象性を帯びていることがわかりました。彼女は精神科に通院していましたが、精神医学的な診断がつく状態にはない、と主治医に言われていました。生育歴を詳細に聞いたなかでも、社会適応はおおむね良好でした。このセラピーは、当初週1回50分の自費によるものでした。徐々に回数は増え、4年目に入るところには、週3回の時間を私は提供していました。しかし私の社会的な都合により、6年目からは週1回の保険診療として、精神科外来で会っていました。

セラピーを始めて、7年目に入ったころのことです。ある日のセッションで彼女は、前日に新幹線のなかで起きたことを語り始めました。用事を済ませた帰りの彼女は、すでに疲れきっていました。そこへ、隣に居合わせた老紳士が、話しかけてきました。彼女はもうろうとしながら、その男性に話を合わせていました。彼女には、相手によってふるまい分ける人格が、何種類かあります。この男性は女好きの人物である、と彼女はみなしました。紳士は、音楽や文学をめぐる自身の好みについて話していました。そして彼女は彼に気に入られ、別れ際に名刺を渡されたということでした。

けれども自分がどのような人物であるか、彼のほうはわからないだろう、と彼女は考えました。

私は、最近のセッションで彼女が、夫との結婚は「お約束」であり、それに従って共同生活をしているのだ、と話していたのを思い出していました。夫婦は、お互いがしたいことの邪魔はしない。そうすることで、良好な関係を維持しているのです。けれどもここ数年のあいだに、私とかかわりを持ちたいという願望が、彼女にとって切実なものとなってきていました。ただ、彼女はそれに言及はするものの、ほとんど話そうとしません。抑制が利かなくなり、セラピーが崩壊してしまうと恐れるからです。自身が若かったころ、まさにそうやって、ある関係が破綻したと彼女は思い、その心痛から私とは別の治療者によるカウンセリングを、長く受けていました。

私はつぎのように話しました。

私はこれまで、あなたのさまざまな面を聞いてきました。でも、実際に私が出会ったことがあるのは、ここでお約束に従っているあなたと、私に抱きついたときのあなたくらいではないかと思うのです。

彼女はこの3年前、セッションが終わって部屋から出るときに、うしろから私に抱きついたことがありました。そのときには、彼女はそれが退行したなかで起きたことであり、家にいる小動物が主人にじゃれつくようなものだ、と主張していました。彼女が私に抱きついたことで、関係を壊してしまったと思ってしまい、やがてセラピーに来られなくなるかもしれない、と私は考えました。そのことを彼女に話すと、性的な意図はまったくない、と彼女は否定していました。

なぜそうした事態になったかについて、私はよくわからずにいました。でも性的な含みを感じたから、治療関係に言及したのだと思います。当時の彼女がする連想は、庇護を受けた動物が野生に

戻れなくなるとか、ある2人が出会うことで、それぞれの人生が破綻していく、という内容の小説や映画とかいったものでした。それらは、私たちの関係がそのようになりかねないと思うところから生じている、とは話し合っていました。それでも彼女は、自身の空想については語ろうとしませんでした。話し出すと自分が崩れてしまって、甘え切ってしまうだろうと、彼女は考えていました。

そうならないために、心理療法の本を買い込み、さまざまな破綻例を調べ、一般的な所作を知り、それに従っていました。毎回定刻には来て、終われば帰っていきます。休むことは、ほとんどありません。ほぼ毎回、夢を報告します。それはお約束になっていました。その定型的なありようが2人の関係をも規定しているように思う、と私が指摘しても、そういう決まりだからそうしている、と彼女は答えるだけでした。自分が見る夢も、いくつかに類型化していました。火事の夢、おしっこの夢、あたり一帯が血まみれになる夢などです。それらに当てはまらないと、夢の奇妙さを示す一例と、彼女は説明しました。

当時の私は、とりあえず彼女の主張を受け入れておくことにしました。彼女からすれば、たしかに性的な意図はないのだろうし、私も自身の想像が、そう思ったということ以上のものではなかったからです。あれから3年、結局彼女はずっと来ています。彼女がどのように考えるか、何をしているかも、ずいぶん私は聞き知っています。けれども、それだけでしかありません。私は老紳士と同じように、彼女をほとんどわかっていないのです。

このセッションでは、私がコメントをしたあと、彼女はしばらく黙り込んでいました。それから、受付に貼ってあるセクハラについての張り紙に言及しました。そして、もしあのとき抱きついたのがセクハラにあたるとすれば、とんでもないことをしてしまったのではないかと、脅えました。

相手が嫌だと感じれば、それはセクハラになる。

倫理規定に抵触するのではないか。患者と関係を持ってしまうセラピストもなかにはいるけれど、ふつうはしない。でもお間違いはしたくない。この部屋のなかでは幻想が展開するけれど、そこでは先生が自分を好きなのではないかと空想することもあり、そうしたお間違いをしてしまう自分は異常なのではないかなどと考えるのだ、と彼女は語っていきました。

私たちは、つぎのようなことを話し合いました。私が会う場所を変えてもセラピーを提供することから、彼女がそうした空想を抱くのでしょうか。その空想は、結局のところ2人で作り出しているものです。けれども外にある張り紙は、お約束に目を向けさせます。それで空想が、倫理規定に抵触し、異常なものであると思わせるのです。

のちのセッションで、彼女は夢を報告しました。

森のなかを歩いていると、父のオフィスがある。地震でほとんど倒壊している。そこにいた知人と顔を見合わせ、いっしょに片づけを始める。

この夢は、彼女による夢類型のどれにも当てはまらないものでした。それでも彼女は、この夢をめぐる連想を語りだしたのです。父親の性格や仕事ぶり、自身の性格形成と母親の影響、地震をめぐる記憶や、知人のことについて。さらに、かつて関係が破綻した相手との手紙にまで、連想は及びました。それは、夢を分類し、夢の要素が現れた最近のできごとをたどろうとするいつもの思考に比べると、だいぶ様相が異なっていました。

V 私はある I-AM

Winnicott は移行対象論文に続く章(1971b)で、夢見ること *dreaming* と空想すること *fantasying* を対比させています。前者の夢見ることには詩的要素、つまり意味の層の重なりがあります。それは過去、現在、未来にかかわり、かつ内側と外側に

かかわっていて、常に本来的に本人自身についてのものです。後者の空想することには、何の詩的価値もない、と彼は断言します。彼にとって夢見ることとは生きること、実際に生きて現実の対象と関係することと、同じ領域にあります。つまりそれは、経験のなかに起きることであり、移行現象の一例なのです。Bollas (1992) はその領域を、主体が事物と出会う場所である、と表現しています。

当初彼女の語る夢は、夢見ることよりもむしろ、空想することに近いものでした。彼女の夢は、それがただ寝ているあいだに見られたものであるために、夢と呼ばれていました。彼女とは隔たっていて、彼女の主観側からの寄与が、わかりにくいものとなっている状況でした。彼女は、その夢を見たのが彼女自身である、という自覚もほとんどなかったほどです。つまり、移行的な性質に乏しいものでした。そうした彼女のありようは、お約束に従った生活とセッションの持ち方にも現れていたと思います。

新幹線の連想から生じた私のコメントは、結果として、私たちがお決まりの会い方をしていながら、性的な文脈もはらんでいることに触れたのだと思います。それゆえ彼女の連想は、セクハラのはり紙から自身のふるまい、そして彼女が夢見ることを経て、彼女の過去の経験へと及んでいったのでしょうか。

地震で倒壊した父のオフィスを片づける夢は、彼女が夢見たものであり、詩的要素を含んでいると言えらると思います。そしてその夢に、私の側も寄与しています。セラピーの設定を変化させたことは倒壊したオフィスに反映しており、私がしたコメントは片づけを思わせる、とみえるからです。そのうえ夢の調度品は、彼女の過去にかかわりを持ち、現在を表象しています。それゆえ、ここから彼女はさまざまな連想や記憶の想起をしていきました。ここには、内側のもも外側のもも寄与している状況があります。移行的な性質がありま

す。

ここで誰かが「これはあなたが思い描いたの？それとも外から示されたの？」と尋ねたとしたら、どれほど破壊的なことでしょうか。ここにはその両方の性質があり、そのこと自体に意義があります。どちらのものであるとか、そこへの寄与の割合を明らかにすることには、ほとんど意味がありません。それどころか、移行的な性質とともに、彼女が見たこの夢の価値は失われます。「もしある大人が、主観的現象の持つ客観性を受け入れるよう主張するなら、狂っている、と認識か診断をする」

(Winnicott, 1971a: 18) ことになるでしょう。主観・客観どちらかによる移行現象への寄与を強調する主張は、こうした経験をしている主体の存立を脅かします。

媒介となる領域における対象の性質について、主体のこころの状態と事物の性格との妥協形成物である、と Bollas (1992) は説明しました。主体からは、抑圧されたもの、意識的・無意識的空想、内的現実などがかかわります。そして外的対象は、その事物の特徴が寄与します。

Bollas によるこの叙述は、私がこの論考の最初に掲げた Winnicott の引用の要約になっていることに、気づかれると思います。経験はこのようにして、内側と外側とがかかわるところのギャップにあって、それらを媒介しています。それゆえ彼にとって、「[自己]は、経験の総和を意味している」

(Winnicott, 1956: 305)。すなわちこの経験という領域は、本来的な本人自身、私という存在 I-AM にかかるものである、と彼は説明するのです。

彼女はこの夢を介して、彼女自身に触れようとしていました。実際にはどの夢でもそうしようとしていたのでしょう。けれども寝ているあいだに見られたというだけのものは、少なくとも私にとって、扱いが難しかったのです。それはただのテディベアでした。テディベアは、移行対象ではありません。「移行的であるのは、むしろ、対象そのものではない」(Winnicott, 1971a: 19) のです。

けれども私たちはそのテディベアを介して、自分自身に触れようとしています。それは、実際に生きることだからです。先に触れた Bollas の要約は、主体と事物が出会うところで妥協を形成していくうちに、私たちが外界に私的な意味を付与するというプロセスを示しています。私たちは内的現実と外的現実を、経験という詩的要素を媒介にしてかかわらせ、この世界に、私がある I am ようにするのです。

Winnicott は著作の最後に、こう述べます。

私は本質となるパラドックスを立てる。私たちは受け入れねばならないし、解決を目指すものではない。このパラドックスは[移行対象]の中核であり、認められる必要があるし、どの赤ん坊を世話するあいだもずっと見込まれておく必要がある。

(Winnicott, 1971c: 204)

概念と知覚のギャップは、今やパラドックスとして、保持されます。解決を目指すものではないために、私たちの誰もが抱えています。そして、どの人とセラピーをするにも、見込んでおくことになります。それゆえ、「セラピーは、遊ぶことの領域 2 つが重なるところに生じる。つまり患者のものと治療者のものである。セラピーは、2 人がともに遊ぶことと関係」(Winnicott, 1971) があります。私たちはセラピーによって、経験をもたらす媒地を提供するのです。

VI おわりに

私は移行対象概念について、再考しました。ウィニコットを読み直すとき、彼は経験に着目したことに気づきます。そこでのできごとが移行現象であり、そこにある対象が移行対象です。それゆえテディベアは、移行対象ではありません。しかし私たちはテディベアを通じて、私たち自身に触

れようとしています。それが生きることであり、セラピーはそのための技芸なのだと思います。その中核にあるパラドックスは、解決させないものであるために、私たちがみな抱えています。彼の言う「遊ぶこと」は、そこに向けられています。

文献

- Bollas, C. (1992): Aspects of self experiencing. In Bollas, C. (1992): *Being a Character: Psychoanalysis and Self Experience*. New York: Hill and Wang, pp. 11-32.
- Winnicott, D.W. (1953): Transitional objects and transitional phenomena: A study of the first Not-Me possession. *International Journal of Psycho-Analysis*, 34, 89-97.
- Winnicott, D.W. (1956): Primary maternal preoccupation. In Winnicott, D.W. (1958): *Collected Papers: Through Paediatrics to Psychoanalysis*. London: Tavistock Publications Ltd., pp. 300-305.
- Winnicott, D.W. (1971): *Playing and Reality*. London: Routledge.
- Winnicott, D.W. (1971a): Transitional objects and transitional phenomena. In Winnicott, D.W. (1971): *Playing and Reality*. London: Routledge, pp. 1-34.
- Winnicott, D.W. (1971b): Dreaming, fantasizing, and living. In Winnicott, D.W. (1971): *Playing and Reality*. London: Routledge, pp. 35-50.
- Winnicott, D.W. (1971c): Tailpiece. In Winnicott, D.W. (1971): *Playing and Reality*. London: Routledge, p. 204.

シンポジウム：ウィニコット・フォーラム 2020「遊ぶことと言葉のあや」

遊ぶことと悪ふざけ：鳴き声を抱えること

追手門学院大学/上本町心理臨床オフィス 石田 拓也

1. はじめに

Winnicott は、精神分析は「遊ぶことを高度に特殊化した形態」(1971)であると述べている。精神分析の中に遊ぶことがあるのではなく、遊ぶことの一つの在り方として精神分析が存在する。つまり Winnicott にとって、遊ぶこと、リアルであることが第一であり、精神分析はそれを実現させるための実践手法の一つであったと言えるだろう。確かに精神分析的な設定における心理療法において、時に私たちはそのような経験をすることがあるかもしれない。しかし現在の私たちは、精神分析はおろか週 1 回の構造化された心理療法でさえも持つことが難しいというのが現状である。では精神分析的な設定を維持し得ない心理的支援において、私たちは遊ぶことができないのだろうか。ゆるい設定、あるいは日常臨床の中で私たちが遊ぶことができるとすると、それはどのようなものなのだろうか。本論では、私たちが日々の臨床実践の中でどのように遊ぶことが出来るのか、学校臨床における事例を参照しながら検討したい。

2. 自己のまとまりと、遊ぶこと、環境

「われわれは、二者関係の前に一者関係があると仮定してしまう。しかし、これは間違っている。(略)一者関係のための能力は、対象との取り入れを通して、二者関係の能力の後に続くのである。」(Winnicott, 1952)

この箴言はウィニコットの発達論が他の分析

家や発達論と異なる部分を端的に表している。他の臨床家は、子どもの自己は初めからそのように存在すると考えるか、自己が存在するようになってから対象との関係性が発展すると考える。しかしウィニコットは、自己とは個体から始まるものではなく、環境と個人の全体的な組み合わせから始まり、環境が赤ん坊を抱えることを通して個体として存在し始めることが出来ると唱えた。つまり母子の境界が未分化な段階においてそこに自己は存在せず、現実の母親という対象を見出すことの次の段階に、はじめて自己は存在するようになるのである。またウィニコットは、幼児が現実を正しく認識し、全体対象としての自分と自分でないものを分けられるようになることを、「母親と幼児がともに生きる」と論じた(1960)。

では、この時期に遊ぶことはどの様に作用するのか。館(2012)が指摘するように、精神分析における患者と治療者の二人のやりとりは、それが例え遊んでいたとしても、外から見れば滑稽なものにもなり得る。心理療法は、本人達にとっては大真面目なことであっても視点を変えればナンセンスで喜劇的でもある。(外から見ればナンセンスであっても、2人は大真面目なのである。悪ふざけが異なる点はここで、悪ふざけは本人1人にとっては真面目でも、他の誰にも取り扱われない。)

それは母親と赤ん坊の関係においても同様で、母親があまりに四角四面に赤ん坊の相手をしてしまうと、お互いに息が詰まるだろう。母親はほど良く赤ん坊の失敗を笑いながら、Handling

する。(もちろん母親もいつかは失敗するし、それを笑うことが出来る程度には、ほど良い母親でいることが必要になる。) そうした関係によって、赤ん坊の自己は環境によってまとめられていく。反対に、私たちが遊ぶことができずにいて、真面目になりながらも時には自分の失敗や間抜けさを笑うということが出来ない、どうなるだろうか。例えばそれがお笑いであれば、頑なに自虐的になることのできない芸人は、スベることになって悲惨な結末が待っているということになるだろう。それは赤ん坊とそれをあやす母親や、さらに患者と遊ぶことにおいても同様である。

しかし、あまりに当たり前のことなのだが、そもそもこうした議論は遊び相手がいることが前提であるとも言える。Winnicott は精神療法における治療者の仕事として、「患者を遊ぶことができない状態から遊ぶことができる状態へと導くこと」(1971) も挙げているが、やはりこの時も遊ぶことが出来る環境があることと同時に、治療者が遊ぶことが出来る存在であることが前提である。では、そのような環境が存在しないとどうなるか。「それは「スベる」という現象が起きない、ということ。お客さんがいてはる、そこでなにかをやる、でも誰も笑ってくれはらない。これを「スベる」というんですが、お客さんがいてはらないから、もうスベりようがないんですわ。それがわかったので、もう、みんなムチャクチャやってますよ。ひょっとしたら配信を見ている人たちが画面の向こうでシーンとなっているかもしれないけど、僕たちには直接の被害はないから、もう対岸の火事みたいな感じですよね。」これは漫才コンビ、笑い飯の哲夫のインタビュー記事だが、コロナ禍にあって、漫才を動画配信していることの実験を尋ねられて、このように答えている。スベることは悲劇だが、スベることができないというのも悲劇の別の側面である。たとえスベったとしても、それがナ

ンセンスな滑り芸として遊ぶことに繋がることもあるかもしれないのだが、そのようにあやしてくれる対象なしには、それは先の例のようにただの悪ふざけになってしまう。こうした自己のまとまりに関連した問題を抱える子どもが悪ふざけに陥っている場面は、案外、学校において散見される。

3. 学校と、オンディマンド法

学校における実践について考えるとき、何よりも現実としてスクールカウンセラーには、勤務回数という契約が存在する。文部科学省の統計(2017)では、半日から1日、週1回から隔週程度、年間では35回前後の勤務条件が多いようである。皮肉にも、この回数制限は、週1回という頻度ではあるが、毎週会うことが出来さえすれば年間35セッションは確保でき、しかも長期休暇という分離も経験するという、古典的な心理療法の設定に近いものになっている。だがこれはスクールカウンセラーが自身の提供できる支援のコストパフォーマンスを考えずに、勤務時間中ずっと面接室に籠っていることが前提であるし、種々の学校行事との関係もあって毎週、対象者に会うことは実際には不可能だろう。私たちはこの限られた環境を前提として、子どもたちにどのような支援を提供できるのかを考える必要がある。この時に Winnicott が実践していたオンディマンド法を参照することは有用だと思う。

Winnicott (1953) は、普通の母親による献身が育児の成功だと述べ、「ほど良い母親」という概念を用いていたし、だからこそ母親に向けた精力的なラジオ放送などの活動によって、母親たちを抱えていたのだろう。彼は、普通の家庭の力を信じていたと言える。そのために、子どもへの毎日分析を主張した Melanie Klein や Anna Freud と違い、如何に頻度を減らすかというアイデアのもとにオンディマンド法を用い

ることが出来たのだと考えられる。Winnicottはオンディマンド法においても、毎日分析と同様に、「本当に深い作業」が達成できることを示唆している(1977)。オンディマンド法において展開する患者と治療者の関係性は、治療者が患者の主観的対象であることに特徴づけられる。妙木は、スクイグルについて論じる中で、外傷に触れ解離が想起されることがもっとも臨床的な作業であり、介入のなかで効果があると述べ、主観的対象として機能することの重要性を指摘している。続けて、治療の終わり方については、「終わりや抑うつは、人生にとって必要とは限らない。いつもどこかにいてくれるという終わり方が、本当の終わり方である」としている。

こうした理解から、私たちは子どもと過ごす限られた時間の中で深い作業を目指すと同時に、「いるときに何ができるか」ではなく、「いないときに何ができるか？」も考えるようになるだろう。自分が学校に不在の4日間、あるいは子どもの前にいない6日間に、周囲の大人がどれだけその子どもと遊ぶことが出来るか、である。それは学校においては、遊べていない教職員を、悪ふざけをしてスベっている子どもと遊ぶことが出来るようにする作業である。

4. 事例「ネコ」

ある10歳代の女子児童Aとの関わりについて提示する。Aは抜毛のほか、学校生活では友達の消しゴムを切ったり配布物を破ったりする、鉛筆を盗む、日常的に急にネコになって教室から飛び出すといった行動があり、規則的な入浴もできていなかった。一方で、学力には問題はなかった。担任は、Aは最近になって急にそのような行動をするようになったのだが、これといったストレスも思い当たらないし、何故そのような振る舞いをするのか見当もつかず、困り果てていると語っていた。

Aと私の初めての出会いは偶然で、私は事前

には彼女のことを何も知らなかった。2学期のある日、私が出勤するとAは玄関先で飼われている金魚に何事か話しかけていた。その時間はすでに授業が始まっていたのだが、Aはそんなことはお構いなしといった様子で、熱心に金魚にちょっかいをかけていた。私がおはようと声をかけると、Aはニャーと返事をした。これがAと私の出会いだった。私が、「ああ、ネコか」と言うと、Aは直ぐに私の足にまとわりついてきた。私が腰を下ろして、「遊んでほしいんやな」と言うと、Aは猫なで声で返事をし、私を金魚の水槽に連れて行った。私が、「食べるの?」と尋ねると、そこだけは「違うわっ」と人の言葉を話した。私が思わず、「喋るんかい」と言うと、Aは少しまりが悪そうに笑って、短く「ニャッ」とネコに戻った。さらに私が、「君はネコなんやから、ちゃんとネコらしくせなアカンで」と言うと、Aは頷きやはり「ニャッ」とネコの返事をした。この間にも数人の教師が私たちの傍を通り過ぎたが、ほとんどが苦笑いをして、残りはAを叱責していただけだった。ただ、この時には私はもう、この子とは何とかやっていけそうだと感じていたので、Aを散歩に誘い出した。そうして私が日本語で、Aはネコ語で、しばらく一緒に時間を過ごした。私はほんの思い付きで、今日は何かしでかして君は先生に怒られたんじゃないだろうか?そのせいでウロウロしていたのかもしれない、と尝试してみた。Aは「ニャニャ」と返事をするので、私は「ネコも大変やな」と言っておいた。結局Aは、次の時間に迎えに来た担任に文字通り首根っこを掴まれ引きずられて、教室に戻っていった。

翌週から、約束もしていなかったのだが、Aは私の出勤時間に玄関で待っているようになった。Aと過ごす2回目のある時間に、私はAをスクイグルに誘ってみた。Aは積極的に取り組み始め、私の殴り書きを「お姫様」にした。いびつではあったが、彼女はそれなりに全体として

機能しているようだった。A は自分の番になると1枚目からぐちゃぐちゃの殴り書きをした。私はいきなりAの混乱を見せられたように感じて面食らったのだが、それを丸で囲んで線を書き加え、ラーメンにした。Aはこれをとても喜んだ。その後、3枚目は迷路(私→A)、4枚目をかたつむり(A→私)にした。私たちは、遠回りをしながらも少しずつ前進しているようだった。以降のAは強迫的に“ジェットコースターから落ちる”スクイグルを描き始めた。ジェットコースターに乗っているのはネコではなく、人間だった。「無理やり振り回されて、落とされる感じかな」と伝えると、Aは返事をせずに、最初のお姫様に「これ、どおゆうこと？」と喋らせた。以降2回、私たちはAの求めに応じてスクイグルと自由描画をした。その主題は相変わらずだったが、Aはきまぐれにスクイグルから描画へと、自分のやりたいようにやっていた。

この時期のAは、担任から指導されては数時間教室を飛び出して所在不明になることを毎日繰り返していたため、その治療的な意味合いはさておき、とにかく手が増えて助かるという意味で、私とAと一緒に過ごすことは許容されていた。私とAの関わりに、最初に興味を持ったのは、管理職の2人だった。校長は私とAのやり取りを面白がって、「おーい、A。先生来たぞ」と校内を逃げ回っているAを呼んだり、3人で金魚にちょっかいをかけたりすることもあった。教頭は私が出勤すると、毎週のAの様子を私に伝えてくれるようになった。そこには担任はもちろん、他学年の教諭、養護教諭、栄養士、学校事務員など、多くの人々が徐々に出入りするようになった。担任は自身が赴任する以前のAの様子について栄養士から聞くこともあったし、学校事務員はAの家族についていろいろなエピソードを交えて教えてくれた、私はAの姉の担任をしてた教諭とも話をするようになった。また気が付くとAは、自分の教室とは別の部屋で、

補助の教員に勉強を見てもらうようになっていた。

ふた月もすると、Aは相変わらずネコではあったのだが、徐々に若干の落ち着きが見られるようになって、クラスメイトのものを取ったり壊したりすることはなくなった。そうすると今度は、いつまでAの特別扱いを許すのかということが職員間で話題になり、ケース会議を開くことになった。Aに関わる大人たちが良くも悪くも、ようやく学校らしさを取り戻したようだった。これまでさんざん手を焼いていたにも関わらずケース会議も開かれずに黙殺されていたAが、学校の中でその存在を見つけられた瞬間だと、私は思った。ケース会議では、特に担任の話では、Aの家族歴や、家でも物を壊したり言うことを聞かなかったりして両親が手を焼いていること。両親とも良い人なのだが、Aの役に立っているかは疑問だといったことを述べた。こうした部分では、教職員はAに対して同情的だったが、Aのわがままを許しておくことはクラスメイトに示しが見つからない。実際のところ、クラスからは不満が出ていて、それに対応するのが大変だし、このままではA自身の友人関係もさらに悪くなるのではないか、ということ懸念する意見もあった。他にも、黙っている人がいないくらいにはそこに参加していた職員全員が話をした。私はこうした話を聞きながら、「最近のAはネコらしくないところがあると思うが、それにしても皆まるでAが人間であるかのように話している」とコメントした。結果、ケース会議は、“まあでも、まだネコだから”という結論になった。好き勝手をして一人で暴れていたネコが、ようやく人になりかけて同級生ともコミュニケーションを取り始めている、そのAに人間のルールを課すことは少し早いかもしれないということで、最低限の学習保障とクラス活動以外はネコで過ごすことが許容された。ただし、ノラ猫のようになるとどこにいるか分か

らずに危険だということで、“散歩行きますカード”も作られた。この会議の後、これまでAが学校でしかしたことを担任が電話で報告するだけの関係だった母親が、学校に相談に来た、と担任が私に教えてくれた。

結局Aは、ほとんどカードを利用しなかった。クラスメイトの手で、教室にAのための段ボール製のキャットハウスが作られていた。Aはたいそうこれを気に入り、友人と一緒に増改築をしたり、友人を招いて一緒に遊んだりするようになった。変化したのはAでもあり、クラス集団でもあり、その両方のような感じだった。そしてAは気に入らないことがあると、教室を飛び出す代わりに、その段ボールハウスに入るようになった。2学期の終わり頃、たまたま段ボールハウスにいるAを見つけた私が、「そういえばAって飼い猫なん？ノラ猫？」と尋ねると、Aは「ノラ猫はご飯食べるのも大変やから、自分は飼い猫」とこたえた。私が「飼い猫やったら、飼い主と関係がどうかっていうこともあるし、それはそれで大変やろう？」と伝えると、「ニャ」と返事をして、授業に戻っていった。

ネコのその後：はじめて出会ってから1年弱して、Aはフラッと私のもとを訪れてきた。Aはその学校にあるローカルなパズルゲームを私に教え、遊んだ。そして担任が持ち上がりになって面白くないし怖いけど嬉しいとか、クラスメイトに誰がいる、最近は何を頑張っているといったことを一通り話して帰った。さらにその1年後、Aはとても早口で話し、好きなアニメについて物知りな、ちょっと変わった子になっている。

5. 考察と、まとめ

Aは、一応は全体としてのまとまりを保持しているようだったが、実際にはバラバラになりそうで、常に落とされる蒼古的な不安があったのだろう。彼女はネコになることで笑いものに

なり、その不安を抱えてもらおうとしたが、その試みも一方向的な悪ふざけになってしまい、上手くいっているとは言い難かった。Aと私はスクイグルを使うことで彼女のそうした不安に取り組んだが、もう一方で私は彼女とその周囲の環境に思いめぐらせていた。彼女のバラバラの自己のそれぞれは、周囲の人間がそれぞれに担っていた。そして彼女を取り巻く環境が遊びを持ってまとまり、それぞれが観客となり彼女を舞台にあげるようになった。彼女自身はそのように抱えられ、変化したようだった。

心理療法では、患者—治療者の無意識が展開し、そこで2人の遊ぶことが重なり合う。それを促進するために設定が利用されるのだが、学校においてはそうした特殊な設定を整えることは難しい。そのためには、より意識的に、無意識が展開するような操作を行う必要があり、それはマネジメントにあたる。システム論の視点に立てば、集団は「自発的かつ能動的に活動するもの」(岡堂, 1991)であり、一度そのように集団が動き始めれば、それは継続される方向にある。そのためには、子どもにかかわる大人たちの間で有機的なつながりを増やすことが必要で、同じ話を何回も、同じ話をいろんな人に、と言葉を重ね合わせる方略を選ぶことになる。それは結果的に、どのようにして子どもの発達を促進する環境を提供するのか？という集団の合意形成の過程として理解出来る。ただし、それは正しい理解を得るための正しい道筋を辿るものとは限らない。譜面通りに正しい音を出すことが美しい音楽になり得ないことと同様に、正しい理解が遊ぶことであるとは限らないからである。重なり合いはするが規則正しく重なるとは限らない、そうした集団の模様や時にはズレることが遊ぶこととして展開するのだろう。それを例示するために、ネコのAについての事例を提示した。

文献

文部科学省（2017）平成 29 年度スクールカウンセラー等活用事業実践活動事例集.

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1366271.htm

岡堂哲雄（1991）家族心理学講義. 金子書房.

館直彦（2012）現代対象関係論の展開—ウィニコットからボラスへ. 岩崎学術出版社.

Winnicott, D.W. (1952). Anxiety Associated with Insecurity. Collected Papers Through Pediatrics to Psycho-Analysis. Tavistock. London:1958. (安全でないことに関連した不安. (2005) 小児医学から精神分析へ. 岩崎学術出版社.)

Winnicott, D.W. (1960). The theory of the parent-child relationship. The Maturational Processes and the Facilitating Environment; Studies in the Theory of Emotional Development. Hogarth Press. London:1965. (親と幼児の関係に関する理論. (1977) 情緒発達の精神分析理論. 岩崎学術出版社.)

Winnicott, D.W. (1971) Playing and Reality. Routledge. London. (遊ぶことと現実 (2014). 岩崎学術出版社.)

Winnicott, D.W. (1977) The Piggle. An Account of the Psychoanalytic Treatment of a Little Girl. Hogarth Press and Inst of Psa. London.

シンポジウム：ウィニコット・フォーラム 2020「遊ぶことと言葉のあや」

遊ぶことと言葉のあや～俳句を通して考える

四谷こころのクリニック 加茂 聡子

俳句は、五七五の十七音からなり、基本的には季語という四季おりおりを代表する言葉を含む定型詩である。

木がらしや目刺にのこる海のいろ 芥川龍之介
手がありて鉄棒掴む原爆忌 奥坂まや
冬空やサンドキツチのしつとりと 田中裕明

ここに、「取り合わせ」という技法でつくられた句を三句あげた。

これらの句は、季語とそれ以外の部分の組み合わせによって構成されている。つまり、芥川の句でいえば、木枯らしが吹いていることと、目の前の目刺しのお腹のメタリックな青に作者が海の色を感じている、ということに文脈上はなんの関係もないのである。このような取り合わせの句を味わう際、読み手はまず季語が喚起する知覚的心象や、情緒的記憶を得て、そのうえで季語以外部分の情景を思い浮かべる、そういった内的作業が行われる。

二句目、原爆忌の句では、まず二本の手が鉄棒を掴むというその動きだけがぐっと寄ったかたちで描写される。作者が鉄棒を掴んだことと、原爆忌、長崎、広島に原爆が落ちた日とは何の関係もない。しかし、原爆忌という言葉からはそこで亡くなった数多の人の諸手、そして8月の気温、夏の日差しで白っぽく飛んだ景色をわたしは連想する。手がありて鉄棒掴む、からは、ひんやりとした一あるいは日に照らされて温かいかもしれない一鉄棒の手触り、鉄棒から手を離れたとき掌に残る鉄臭さが思い浮かぶ。生きて今ここにいる自分と、過去に生きていた大勢の人たちの人生が一瞬で変わった出来事、そして過去も今も同じようにある

真夏の光がひとまとまりの景色として、読み手であるわたしの心に顕現する。

三句目、冬空の句は穏やかで静かな句である。散文にすれば、冬空の下、しつとりとしたサンドイッチを食べようとしている、というそれだけのことだ。ここにさらに言葉を加えて鑑賞するなら、冬空の下サンドイッチを食べる場所はどこだろうか。わたしは公園のベンチ、あるいは郊外の駅のベンチなどを想像する。座っている座面のひんやりとした感覚、足元にたまっているかもしれない枯葉が足を動かすとかさこそという音や靴越しに伝わる触感、傍らには温かい飲み物が置かれているかもしれない。そんな静かな戸外での一人の昼食が自分の心を満たす思いは、わたしが想像するには何か好ましいものである。そして、この静かに満ち足りた感じは、春空や夏空のもとでしつとりとしたサンドイッチを食べる感覚とは、わたしが想像するには随分と異なった情趣なのである。

わたしは俳句と精神分析に同じ頃に親しみ始めたのだが、初心の頃はその二つの実践上の類似点を見つけることが面白くて仕方なかった。より深く学ぶうちに、文芸である俳句と精神分析が似ていると安易に考えることはなくなったが、今回俳句と精神分析、そして遊ぶことについて考えた際、当時そうやって面白がっていたことを思い出した。乱暴な抽出ではあるが、わたしが感じているいくつかの類似点についてここで述べる。そしてこの類似点とわたしが感じたことは、ひいては俳句という詩形、実践の特徴にもなっている。

一 カタコト性（俳句にける切れや省略）

精神分析的な実践において治療者が患者の連想

を聞いているとき、連想の話題は途中で変わり、ときに主語が省略されたり、沈黙が挟まれたり、と通常の社交場面での会話とは、使われている言葉の質や文法のありようは大分異なっている。一方俳句では、季語とそれ以外の部分の文脈が断たれており、そもそもの短さもあいまって、その句の背景などの文脈を構成することは不可能である。この空白の多い語り、空白の多い詩形において、治療者の逆転移や物思いが生まれる空間が生まれ、俳句読者の鑑賞が生じる心的な空間が生まれるようにわたしは考えている。

俳句においてこの空白部分をより豊かにするための技法が、「切れ」と「省略」である。その短さ、季語を含むという縛りも含めて、心情にせよ、情景にせよ、俳句において言葉で描写しつくすことは不可能である。言えない、という形式の限界を受け入れないで句を作ろうとすると、句はひどく窮屈になったり、つまらないものになる。ある情景を句にする際に、何を省略し、何を残すのか、と言葉を選ぶところは創作上の技術でもある。

冒頭で紹介した芥川の句における「木枯や」のや、は切れ字と呼ばれる。この切れ字には句を文字通り「切る」機能がある。冒頭の三つの句で説明したように「句の中のこの二つの部分は文脈上関係ない」という意味である。切れの深さは、句や論者によって幅があるところなのだが、俳人の長谷川權は、「切れによって言葉と言葉の間には空間的、時間的な幅が生まれる」と述べている。確かに、わたしは先ほど原爆忌の句において目の前にある鉄棒、夏の光と、75年前の広島長崎のことを同時に思い浮かべていた。そのような同一の時空間に相容れないものを同時に想起することを可能にする仕組みとして「切れ」は用いられている。有名な、松尾芭蕉の「古池や蛙飛び込む水の音」は、一般的な解釈では「古い池に蛙が飛び込む音を聞いている」とされることが多い。この場合の切れ字の使い方は、余韻や詠嘆、と説明されていた。しかし長谷川は、本来切れ字は句の内容を切り離すために

あるのだから、という原理原則に従って、「どこから蛙が水に飛び込む音が聞こえており、その音から心中に古池の面影が浮かび上がってくる」と再解釈を提示している。論理的には十分あり得る解釈である。また、散文的に切れを消して「古池に蛙飛び込む水の音」としてみるとどうだろうか。長谷川解釈によるにせよ、よらないにせよ、古池やで一泊おくかおかないか、ということによる読者が受ける陰翳や余韻は大分異なることが感じられるのではないか。

ここで、切れや省略が際立っており、かつ母親の不在や同胞葛藤といったわたしたち精神分析的な臨床家に馴染みのある感覚を呼び覚ましやすくとわたしが感じた句を二句紹介する。

お手玉に母奪われて秋つばめ 寺山修司
兄弟に母の手二つ暮れかぬる 南十二国

劇作家寺山修司は「目つむりていても吾を統ぶ五月の鷹」や「林檎の木揺さぶりやまず逢いたきとき」という代表句をもつ俳人でもある。この秋つばめの句は眼前にいても心はお手玉にとられている母親の心理的な不在を描写した句である。秋は寂しさが際立つ季節だが、今は眼前にいてもこの後に渡っていなくなる秋燕が配されていることから、母不在の寂しさはさらに際立っている。南十二国は現代の若手俳人である。暮れかぬる、はだんだん暖かくなり日が伸びてくるという春の季語になる。兄弟に母の手はふたつである、という描写から読者はどんな光景を想像するだろうか。母を真ん中に二人が手をつないでいるのかもしれない。下の子が抱っこされたりベビーカーに乗っていれば、上の子は母の手には触れられず、服の裾を掴んでいるのかもしれないし、一人傍らを歩いているのかもしれない。三人の様子が詳しく描写されていないために、そこにどんな情景を想像するかが読者の側の解釈に委ねられている一例といえる。

二 「共有された現実」としての季語

ウィニコットは心理療法は患者と治療者二人の

遊ぶことの重なり合いのなかで起こると述べている。また、中間学派のマイケル・パーソンズは遊びとは、共有された現実を探検する二人の人間にとってのやり方なのだと述べた。俳句における季語は、この文脈でいう共有された現実、あるいは中間領域的な働きをするのではないかとわたしは考えている。

季語とは、四季それぞれを代表する、季節感を強く含んでいるとされている言葉である。俳句作者ではなくても知っている季語から、俳句作者にとってもよく知らない季語まで、現代の大きな歳時記に収録されている季語は2万ともいわれている。歴史的にも新旧がある。最も古い平安王朝時代の代表的な季節をあらわす言葉としての雪月花、紅葉、時鳥に始まり、江戸時代には、田植や稲刈りといった稲作農耕文化に根差した言葉が加わった。その後も廃れた言葉、新たに加わった言葉があるが、この100年以内に歳時記に加わった季語としては賞与(冬)や、帰省(夏)といったものがある。

俳句における季語の機能は、第一には句に季節感をもたらすことだが、同じように大切なのは、様々な連想を読者にもたらすということがある。

桜は春の代表的な季語の一つである。ここで、桜という長い歴史をもつ季語がもつ連想力の幅を示すために、桜の句を四句紹介する。桜は、小さな花弁が散っていくその散り方、木全体が灯のように咲くその花のつけ方、から、生命の儚さや、ときに死を暗示する場合もある。

ちるさくら海あをければ海へちる 高屋窓秋
 ごはん粒よく噛んでみて桜咲く 桂信子
 夕ざくら髪くろぐると洗ひ終ふ 鷺谷七菜子
 想像のつく夜桜を見に来たわ 池田澄子

高屋窓秋と桂信子の二句は散ると咲く、という対照的な動詞の働きが大きく、また窓秋の句には切れはなく桜のみを描写している句である。海の青と桜の花びらの対比の美しさは勿論のことだが、散るとという言葉に一層の儚さを読み手は感じるのではないだろうか。対して信子の句は、ごはん粒

をよく噛んでいる、という健やかな日常の情景と桜が開くことのとりのあわせでつくられている。よく噛むことで感じられる飯の甘味と共に、ある種の穏やかなめでたさ、大げさな言い方をすれば寿ぎの情をわたしは感じる。

鷺谷七菜子の歌は、黒々と髪を洗い終えた、という措辞からは長い黒髪、恐らく女性を読者は想像するだろう。夕ざくら、というのは文字通り夕方に咲いている桜のことである。黒髪に向けられている女性のナルシズム、黒々と髪洗ひ終ふ、は季語次第では壮絶な感覚も呼び起こし得る情景だが、夕桜との配合により、おっとり、やや気怠い気分でもとまっているようにわたしは感じる。最後の池田澄子の句は、夜桜を口語でよんでいる異色の作品である。「想像のつく夜桜」と言われてしまえば、確かにわたしたちは「あの場所の夜桜」について想像はついているのである。想像はついているけどね・・・とちょっと斜に構えながら、この句の作者は結局見に来ている訳だ。季語はわたしたちの過去の体験の集積から、共通のイメージや情趣を喚起する言葉だが、俳句作者は、多くの俳句と出会うことでそれぞれが持つ季語のイメージをより豊かに膨らませる。それまでになかった意味合いで季語が使われている句に対して、読者が「そういわれてみれば、そういうこともある」とある感興をもって受け止めたとき、その句は季語の幅を広げた句ということになる。澄子の句は、そんな役割を果たしている一句なのである。

そして、こうやって様々な句と親しみながら季語に馴染んでいくうちに、わたし自身は現実の季節に対する認知が変わってきたように感じている。たとえば空の色や空気の湿度温度の変わり方に、より鋭敏に次の季節が近いことなどを感じたり、植物の葉の色合いの変化に気づいたり、ということである。詩を通して言葉を体験することで、わたしたちの外界の認識も変容する。

精神分析や中間学派の論客の思考と馴染んでから改めて俳句、特に季語の働きについて考えてみ

たときに、わたしは季語とは、彼らの言う「共有された現実」あるいは、「中間領域」で機能している言葉ではないか、と考えるようになった。もちろん、ウニコットが言うように、文化的体験が可能性空間に位置付けられているとすれば、俳句という文芸上の遊びそのものも、可能性空間に位置付けられるものである。そして、中間領域についてウニコットは、主観性と客観性観察が刺激的に織り合わされている、個人の内的現実と外的な世界の共有された現実の中間にある領域と描写している。

これまで述べてきたように、季語が言葉として指しているのは、主に動植物や天候などの外的現実である。一方で季語の機能とは、季語が含意しているある情趣を示すとともに、読み手それぞれにとってのパーソナルな、時に知覚情報を伴った記憶を刺激、喚起することでもある。作者と共有している外的現実と同時に、読み手それぞれの内的現実も駆動される。そして、次項で述べる句会という場では、読者側の体験が作者に伝え返される。こういった営みはまさに、パーソンズが遊びについて述べたところの、「共有された現実の探検」ではないかとわたしは考える。

三 他者の存在（句会と選者—結社における師弟関係）

そして、これもまた言うまでもないことだが、個人心理療法や精神分析は治療者と患者、二人の間での営みである。精神分析は最終的には分析家が内在化され、自己分析ができることを目指しているところはあるにせよ、その過程には治療者という他者を必要としている。同様に、俳句は、作品として成り立つためには読み手、願わくば豊かな鑑賞が出来る読み手を必要としている。治療者との間、読み手の解釈や鑑賞によって、患者や作者の側にも新たな理解が偶発的に生まれるといった出来事をわたしは体験して来た。

俳句には他の文芸に比べて、実作者と読者人口の重なりが非常に大きいという特徴がある。それ

は、句の読み方、作り方の「お作法」が読者に共有されていた方が鑑賞は容易だからだと考えられている。そして、読み手が豊かな読解、鑑賞をすることで、作者にとっても自分が思っていた以上の良い句に生まれ変わる場合がある。こういった過程のために必要な仕掛けの一つが句会、そして結社と呼ばれる俳句団体における主宰（選者）との師弟関係である。

句会では、参加者がそれぞれ作った句を提出して、作者名を隠し、ランダムに並べなおした「句稿」が全員に配られる。次いで、参加者はそれぞれ自分が良いと思った句をいくつか選び、発表する。その後、選んだ人はなぜその句が良いと感じたかについて講評し、さらにその句を選ばなかった人は「なぜ選ばなかったか」をコメントする。講評が終わった後に、作者が問われ、作者は名乗りをあげる。句歴も立場も年齢もばらばらなグループで、それぞれの句は作者と切り離された状態で講評、時に議論、稀に酷評される。そしてこの場で得た講評を元に、作者は句を推敲することもあれば、一旦寝かせることもあり、時に捨てる。

さらに、多くの俳句作者は結社という集団に所属して、リーダーである主宰に毎月自分の句の選を受けている。わたしの場合は、毎月6句を送り、そのうち何句かが主宰に選ばれて雑誌に掲載される。ここでわたしは主宰の読みに自分の句を完全に委ねている。どんなに自分で気に入っていた句でも選ばれなければ、自分の作品としてはこれまでの範疇を超えていないか、既に読まれている素材か、そもそも大して面白くないか、なのだと諦める。この選者との関係は、傍目には依存的な、あるいはある種の共謀関係が想像されるかもしれないし、その危険がないとは言えないだろう。しかし、これまで述べてきているように俳句はその短さゆえ、多様な鑑賞が可能な詩形であり、その評価も一定のものではない。同じ選者に続けて選を受けることで、作者は句の作り方、読み方について選者と共通の土台を持つ。共通の土台の元に選

ばれる、という、詩としてのオリジナリティや普遍性とは逆行するように聞こえるかもしれない。しかし、俳句の場合、普遍性やオリジナリティは共有されている文脈からの微妙な差異から生まれる場合があり、わたしを含めた俳句会の会員は、その普遍性をもった作品を発見できる読み手として選者を想定している。他の文芸、あるいは美術も、作者は鑑賞者の視点を意識するだろうが、その場合は（鑑賞者から）「どう見える」かを意識しているのではないかとわたしは予想する。俳句の場合、勿論技法的なところで工夫できる場所はあるにせよ、読者が自分の句をどう受け取るか、作者が予想することはときに困難である。作者自身が予想していなかった句の解釈に驚いたり、時には推敲という更なる創作に繋がったりすることが、句会や結社という場でのよろこびの一つだとわたしは感じている。

四 声、提示すること。

また、俳句は音声、声の文芸でもある。これは、俳句を作らない方には馴染みのない感覚かもしれない。句会において、句は必ず読み上げられる。そうやって声に出して読むことで、調べといわれるリズムや韻律、句またがりによばれるリズムの悪さ、などが音やひびきとして体験される。精神療法、精神分析も言葉を使うが、それはまず声を通して患者に、治療者に伝達される。意味伝達をする言葉以前の音声部分があった上で交流が生じ、そこに新しい句の読み方や、患者にとっての変容がもたらされるのである。

サリヴァンは、精神療法場面における言葉とは、何よりも **vocal** なものであると述べているが、俳句もまた声に出して読むことで体験される文芸である。句会では実際に声に出すし、句集を読むときも、わたしは脳内では音声化して体験している。また、俳人の小川軽舟は、その句の意味内容を超えて読者の心を動かそうとするものが詩であり、そのための韻律であり修辞であると述べている。

一方で、詩について言及している中間学派の精

神分析家としてはボラスとオグデンがあげられる。ボラスは日本精神分析学会での講演において、芭蕉の句についても言及しているが、同じ講演の中で言葉が表象的 **representative** ではなく、呈示的 **presentative** に機能する場面について述べている。ボラスもオグデンも、詩を経験する、と表現しており、特にボラスは詩は読むのではなく経験するのだ、と念を押している。ここには詩の提示的要素、つまり詩がどのように表現されるか、そして聞き手の体内でどのように共鳴するか、という聞くことにまつわる身体的心的な体験も示唆されているようにわたしは感じている。オグデンは、「詩を体験することに基づいて、その詩についての自分自身の感覚の作者となり、自分自身の体験を描写するための言葉を見つけようと試みる。」と述べている。ここで彼は詩を体験するというのも一つ創造性について触れているが、句会では鑑賞者の言葉が作り手と再度会うことで、さらなる創造の契機にもなっているとわたしは考えている。

ここで、あまり意味のない、音韻の働きが大きい句を二句紹介する。

三月の甘納豆のうふふふふ 坪内稔典

チチポポと鼓打たうよ星月夜 松本たかし

坪内稔典は甘納豆と12か月で12句作っているが、最も人口に膾炙しているのがこの句ある。その理由は、この無意味さと調子のよさにあるのだろう。そして、無意味と思いつつもわたしは三月、ひな祭りの時期に出会う甘納豆……この場合わたしは白っぽい大きめの甘納豆がいいなと思う…に、うふふふふ、という擬音（これは甘納豆が笑っているとも、三月の甘納豆をみるとうふふと笑いがこぼれる、でも解釈は成り立つ）が非常に似合っている、と感じる。

松本たかしは、能楽を生業とする一家に生まれながら結核を患って能楽は断念した俳人である。星月夜、は星明りだけで月夜のように明るい、という秋の季語だ。能楽を身近に育ったたかしの耳に鼓はチチポポ響くのかもかもしれないが、わたしが

記憶している鼓は「チチポポ」とは鳴らない。すくなくとも、ポポはあってもチチとは聞こえない。それでも、チチポポという擬音の楽しさは、秋の美しい夜の星明りに誘われているようだし、童謡の証城寺の狸たちのことも思い出す。都会に暮らしていると、星月夜が体験できるような闇にはなかなか出会わないのだが、それでも気分の良い秋の夜にふいに思い出す句の一つである。

わたしの俳句の師である小川軽舟の句を紹介して本稿を終える。

平凡な言葉かがやくはこべかな 小川軽舟

わたしにとって俳句と精神分析は、たまたま同時期に馴染み始めて、別個に続けているものである。俳句をつくるから、臨床家として優れている訳ではもちろんないし、精神分析の訓練を受けたから俳句が上手になったということもない。ただ、

どちらも言葉を丁寧に扱い、またその機能について考えながらも遊ぼうとする営為であり、ここまで記述したような共通の側面はあるようにも考えている。臨床場面でも、句作においても、難解な言葉が使われる必要はない。むしろ平凡な言葉や日常語が、心理療法場面の二人にとっての特別な言葉になったり、結果として変容に導かれることは珍しくないだろう。そして、句においても、臨床においても、良い詩としての句が生まれたり、临床上の重要な瞬間が訪れるのは、作者や治療者が意図してのことではない、こともまた確かなことではないか。

一俳人として詩の訪れを待ちながら、これからも俳句を続けたいと思っている。

文献

小川軽舟(2004)「魅了する詩形—現代俳句私論」富士見書房、東京

長谷川權(2004)「俳句的生活」中公新書、東京

Micheael.C.Parsons(1995)東中園聡訳「ウィニコットにおける遊びの概念」「ウィニコットの遊びとその概念」牛島定信、北山修編、岩崎学術出版、東京

D.W.Winnicott(1971)‘Playing and Reality’橋本雅雄、大矢泰士訳「遊ぶことと現実」岩崎学術出版、東京

C.Bollas(2010)‘Character and interformality’館直彦監修、藤本浩之訳「性格とインターフォーマリテイ」精神分析研究54巻3号

シンポジウム：ウィニコット・フォーラム 2020「遊ぶことと言葉のあや」

子どもの言葉にひきつけられることとふりまわされること

広島市こども療育センター 渡部 京太

I. はじめに

ウィニコットが剥奪児について考えるようになったのは、戦争という時代の影響と言えるだろう。ウィニコットは戦争が始まるまで、剥奪児の精神療法や彼らの起こす非行や反社会的行動についてあまり発言することはなく、それは精神分析では十分な対応はできないというのがウィニコットの考えだった。しかし、戦争が始まり、ウィニコットはロンドンで戦災に遭った子どもの受け入れ先であるオクスフォード郡の児童受け入れ施設のコンサルタントに着任し、彼はそこを週1回定期的に訪問し、主にスーパービジョンを通してコンサルタントとしての業務を行っていった。

ウィニコット¹⁾は、反社会的傾向を神経症と精神病の中間に位置づけている。神経症はほどよい環境が提供された中で育った子どもに生じる。精神病では、非常に早期に侵襲が起こっている。反社会的傾向が生じるのは両者の中間的な段階であるとしている。ウィニコット²⁾は、なかでも盗みを重視したが、反社会的傾向の背景にはなんらかのニードがあると主張している。子どもが二次疾病利得にまきこまれていない場合には十分な治療可能性があり、そのことを「非行は希望の兆候を含んでいる」と主張した。二次疾病利得が生じてしまった場合には環境を立て直すために特別の治療設定が必要になり、それは施設に入所しながらのマネジメントということになる。

クレア・ウィニコット³⁾は、『愛情剥奪と非行』の序文において、「今日の臨床上の問題は、ほどよい思いやりとほどよい強さをたたえた環境をいかに維持するかということと、援助者と養育や抱え

られることを強く希望しているにも関わらず、愛情剥奪を経験し非行に走っている人とをいかに抱えるかという点にある。ただ、援助を見だした時には逆に、援助を破壊することに全力を尽くしてしまう」と書いている。

治療者がきょうだいに性的な暴力を加えていた子どもの言葉にひきつけられ、その後言葉のあやにふりまわされ、治療者や家族やまったくあそびがない状況に追いこまれた症例を経験した。子どもとその母親は、剥奪環境の中で生きてきた。母親を奪われた子どもの強烈な怒りが家族を追いつめていったところから回復しつつあるところをふりかえりたい。

II. 症例 Z

1) Zの発達歴・現病歴

Zは幼小児期から衝動性が強く、転園を余儀なくされたという。小学校入学後も衝動的な行動は続いた。10歳時に、「感情的になりやすい。きょうだいへの暴力。うそをつく。お金を持ち出す」ということを主訴にクリニックを受診。注意欠如・多動症(ADHD)、反抗挑発症と診断された。Zの母親は、子どもの友達の母親と話をしている時に、Zの妹が友達の母親の下半身をしきりにさわることがあり、母親は、Zが妹に性的暴力をしているのではないかと気になったという。母親が、Zに問いただしたところ、Zは認めた。Zと両親は、相談機関に訪れた。Zは、妹との距離をとることが望ましいと判断され、保護されることになった。その施設で、新しい入所児が来ると、暴言、暴力といった興奮状態になることが続き、私に診察するこ

とを求められた。

2) Zの家族

Zの母親は、注意欠如・多動症 (ADHD) の特性を認めた。母親は話をまとめて話すことが苦手で、話を聞いているうちに誰の話しをしているかさっぱりわからなくなる話し方をするのだった。これは、Zの話し方とそっくりだった。母親の家族は祖母、曾祖母が家族の実権を握っていた。母親は家族からはスケープゴートのように蔑むように扱われてきたと話し、母親のかけおちや結婚の失敗を非難され続けていた。一方、母方祖母と曾祖母は、Zを溺愛し、なんでも許されたという。

Zには、Zの実父とふたりの継父がいた。Zの実父は、母親と駆け落ちして結婚した。結婚後は、豹変してとても怒りっぽく、Zの妊娠がわかると、すぐに別れた。

Zの初めの継父①は、母親に激しい暴力をふるい、Zは母親へのドメスティック・バイオレンス (DV) を目撃していた。さらに、Zの大切なおもちゃを壊すなど執念深くZをいじめた。母親は、継父①からのDVに耐えかねて離婚した。

その後母親は再婚して、ふたりの子どもが生まれた。ふたりめの現在の継父②は、元々は不良少年で、どんなに悪いことをしても見放さなかった継父の両親に深く感謝していた。継父②はZの実の父親になろうと心を砕いてきたという。

Zにはふたりのきょうだいもいた。Zの妹は、4歳時にかんしゃくがひどいため小児科を受診し、自閉スペクトラム症 (ASD) と診断された。その後Zからの性的な暴力が発覚し、相談機関に来所した。プレイセラピーが開始されたが、おもちゃで治療者の胸やおしりをさわろうとすることが繰り返された。感覚過敏や激しいかんしゃくは続いていた。

Zの弟はほとんど発語がなくクレーン現象を認め、ASDが疑われる状態だった。母親の養育は十分に手がまわっていないようだった。

3) Zとの診断面接

私は診断面接の時に、Zを一目見るなり息をのんだ。以前治療に関わった犯罪を繰り返している男性と生き写しのようにそっくりだったのである。とは言っても、発表者は実際には彼と会ったことはなく、関係者のコンサルテーションを行っていたのだった。その後、発表者が彼の姿を目にすることになったのは、出張移動中に事故のために電車で数時間立ち往生にあった時だった。スマートフォンでニュースを見ると、その男性がある犯罪を犯したことが報道されていた。彼の名前を検索すると、彼がたどったその後の経過を知ることができた。私は臍をかみ、その男性の持っていたであろう闇の世界の深さにおおのきながら、今度はなんとかしなくてはいけないという思いになった。

ZはADHDの特性を持ち、さらに不適切な養育環境で育ち、Zにとっては母親と一緒にいたくても、母親のパートナーや継父、生まれてきたきょうだいに取られてしまうと感じていたと思われた。また、Zの母親にとってZはパートナーや継父①からの暴力から一緒に生き抜いてきた存在として頼っていたところもあったと感じられた。Zにはきょうだいも生まれたが、ASDの特性を持っている子どもは、母親にとっては実は育てにくく、認めたくない (ネグレクトしたい) という思いもあるように感じた。その一方で、継父の「家族をひとつにまとめたい」という気持ちと母親の思いにはずれがあるように私には感じられた。

私は、Zの治療プログラムの組み立てについて、次のように考えた。Zは、妹への性的暴力を認めず、さらに十分な振りかえりはできていないため、矯正施設での治療が望ましいと考え、相談機関にもその判断を伝えた。さらにZのかんしゃくへのマネージメント、薬物調整を行うこととした。Zの妹の対応については、別の医師が担当した。妹は泣き叫んで診察室に入室できなかったため、母親は妹の担当医への不信感を募らせた。

私は妹の担当医と相談し、母親に CARE プログラムや親子相互交流療法 (PCIT) に導入することを検討した⁴⁾。私は、妹への対応と Z の弟の発達の評価を行うことを母親に提案したが、母親はなかなか態度をはっきりとしなかった。

Ⅲ. 治療経過

その後妹は、兄以外の通所施設の大人からも暴力を受けていたと語った。その大人は警察の取り調べを受けたが、証拠不十分で不起訴になった。両親は、Z を家にどうしても引き取りたいと語った。Z の継父は、「母親は妹、弟と暮らし、自分が Z と別々に暮らすようにして養育にあたりたい。家族がひとつになれるように、自分が悪いことをした時でも親は見捨てなかった。Z を見捨てずに養育にあたりたい」と語った。私は相談機関には矯正施設への入所が望ましいことを伝え続けたが、相談機関は Z を家に戻す決定をした。私は、相談機関の決定に嫌な予感を感じた。

そのような状況で、私は相談機関で Z と面接をした。Z は「夜勤があって父親がいない・・・赤ちゃんが僕のことを食べている。手に穴があいている。生まれたての赤ちゃんだったのに、顔が裂けて大きい女の人になる。僕は食べられそうになって逃げた。知らない太ったおばちゃんに夕飯に「ooを作ってあげる」と言われ、連れられて帰ることになった。太ったおばさんは、やせた若い女性に変わって、口が裂けていてものすごくこわかった・・・殺されたかと思ったら、今度は友達と映画を見ました。友達と野球をしているのですが、赤ちゃんがベンチに座っているのです・・・ものすごくこわいです・・・さっきの若い女性がいます・・・友達は見捨てていなくなります・・・僕は若い女性と赤ちゃんに連れていかれます・・・家では僕は解剖されるように料理をされます・・・神経や血管などをすごく丁寧にはがされていくのです・・・」と話した。私は Z の話を聞きながら、夢のメモをとっていた。メモをとる私に、Z は「僕の調理方法を書いてい

るようですね」と話した。さらに、Z は「身体が痛い」と話した。私は Z に夢の要素分析を行った。赤ちゃんについては、Z は「きょうだいが生れた時はかわいいと思った」と語った。おばちゃんや若い女性については、Z は「施設のスタッフ」を連想した。家に連れていかれるについては、Z は「僕は家族一緒に暮らしたいと思っている」と語った。Z は夢についての印象を尋ねると、「赤ちゃんがこわかった」と話した。精神分析を学び始めた私は、Z が夢を報告したことにひきつけられた。また、私は Z の妊娠がわかるやいなや Z と母親を見捨てた男性に嫌悪感を感じた一方で、その男性はどこかで女性をひきつける力を持っていたのだと感じた。私は「神経や血管をはぎとられると痛みを感じなくなったり、生きていくために必要な栄養や酸素が伝わらなくなる」ということを連想した。私は、「Z は、赤ちゃんをこわいと思っているのでしょうか。母親を取られてしまうと感じていたのかもしれませんが。私は、夢の報告の後で足が痛いと話していたことが気になります。Z が、心で痛みを感じているのか、心で痛みを感じるのではなく身体が痛いと言っているのかが気になります。私や相談機関のスタッフが、Z が妹にしたことをどのように思っているのかを、細かく神経や血管をはぎとるように見ていると Z はとても気にしているのでしょうか」と伝えた。Z は、私の言葉を聞いて、「僕は家族と暮らしたい」と語った。

その後、Z は素行のよくない上級生とつるむようになった。Z は、友達や上級生に「僕の父親は元不良で、人を傷つけたり、火をつけるなんてなんともない」と話していた。自宅からお金を持ち出していたことが発覚した Z は、継父②から詳しく事情を尋ねられ、ガールフレンドができた上級生に、Z は「僕は妹とセックスをしている」と語り、上級生から「黙っていてやるからお金を持ってくるように」と脅されていたこと、さらには弟にも性的な暴力をしていたことを語った。Z の家族、学校は大混乱に陥ったが、Z は教師や友達に

「父親から脅迫や虐待を受けてきたから、上級生にお金をとられたと話した」と話した。継父②は、Zに「一緒に家族としてやっていきたい。上級生とのつきあいはやめよう」と諭し、Zは納得したような表情をしていたという。その後、天地を揺るがすような出来事が起こった。

休暇中だった私のスマートフォンのバイブレーションが深夜突如響いた。火事があったという地域ニュースだった。地域ニュースが届くような設定にしていなかったため、胸騒ぎを覚えた。私が休暇から戻ると、Z、Zの家族をめぐる状況は一変していた。Zの継父②は、Zからお金をまきあげていた上級生の家にZと一緒に「もうつきあうことをやめてほしい」と直談判に行った。その日の夜にその家が火事になり、Zの継父②に放火の容疑がかかったのだった。Zが友達などに「僕の継父②は火をつけるなんてなんともない」と話していたが、継父②に容疑がかかることにつながるとまことしやかに囁かれていた。ほどなくZは相談機関に一時保護され、矯正施設に入所することになった。

母親は、「周囲から盗聴や監視されている感じや嘲笑われたり、噂をされているような気がする」と訴え、眠れずに憔悴しきっていた。さらに、「腕のいい弁護士を紹介してほしい」とも語った。私は、Zの母親のような状態になることは無理もないことだと伝えた。そして私はZの母親に、次のような提案をした。①1日1回定期的にソーシャルワーカーが電話連絡を入れること。何かあれば対応できることはするし、電話には出ても出なくてもいいこと。②母親自身が精神科に通院治療を始めること。③妹や弟は父親が不在になり不安だろうから、母親にCAREプログラムを行うこと。母親は、自身が精神科に通院治療を始め、CAREプログラムを始めることに同意し、開始した。母親は、精神科に通院し、自分の生育歴をふりかえることで少しずつおちつきを取り戻した。その後、継父②は証拠不十分のために容疑は晴れたのだっ

た。

矯正施設に入所したZは、①心理士による2週に1回の面接、②スタッフによる生活指導が行われた。私は、相談機関のスタッフとともに、③月1回Zとの一般外来での診察、④Zが問題を起こした時には随時コンサルテーションを行うことにした。その矯正施設では、大幅にスタッフが変わり、「子どもが混乱しないように家族の話をしてはならない」という方針になったということだった。私はますます絶望的な気持ちになった。

Zは、これまでと同じように新しい入所児が来て施設スタッフが新しい入所児の指導をするたびどく興奮をした。興奮したZは手をつけられず、上級生からも「関わると危険な子ども」と見なされた。興奮した理由を尋ねても、Zの説明はしどろもどろだった。それは、母親の話し方と似ていて、本人は正直に伝えようとしてもかえってごまかしているように聞こえた。そこで、スタッフと相談して、Zには「Zが言いたいことは〇〇ということだろうか」とすぐにはまともせずに「とにかくシンプルに相手に伝わるように話すこと」を根気強く求めることにした。そして、Zが興奮した時には断固としたタイムアウトの時間をとることを徹底してもらった。その一方で、Zは生活が整った環境の中で勉強し、アクティビティを楽しみ、野球に打ちこんでいた。新たに担当になったスタッフと一緒に来院した面接では、野球大会の直前に興奮して他児ともめてしまい、『反省』を求められ、野球大会に出場できなかったことが報告された。そのスタッフは、別のケースと一緒に担当したことがあった。私は、無性にそのスタッフに以前担当していたケースが改善に向かっていることを話したくなった。またスタッフが変わっていない様子にほっとした。私は、目の前にいるZを一瞬ネグレクトしていたことに気づき、そしてこの家族の中で手つかずのことは何だろうかと思いをめぐらせた。Zは「練習したのに、反省で野球大会に出られなくなってしまった。とても残念でおち

こんだ」と話した。私は、スタッフに家族のことにふれてはいけないと言われていたが、Zに「新しい入所児が入ってくると、Zはおちつかなくなることが多いですね。スタッフが新しい入所児に関心を向けると、Zには怒りの気持ちやさみしい気持ちがするのでしょうか。これは、これまでZの家で繰り返し起こってきたことだよ。Zは母親と一緒にいたいのに、新しい父親、妹、弟に母親を取られてしまうという気持ちになることを困ってきたのではないのでしょうか」と伝えた。Zは考えているようでしたが、何も答えなかった。私は、「Zがこのことについて話したければ、ここにもいろいろスタッフは君をサポートしてくれるでしょう」と重ねて伝えた。Zは診察後に、相談機関でも面接し、発表者が伝えたことをスタッフと話し合っただけで矯正施設に戻った。

私は、Zの母親自身の治療に継父と一緒に通院することを確認したうえで、滞っていたZの妹の治療の転院を勧めた。Zが矯正施設に入所して半年が経過した頃に、運動会が開催された。Zは「運動会に参加できてよかった。行事にきちんと参加できたのは初めてだったかもしれない」と語り、参観に来た両親もZの成長を感じているようだった。さらに、Zは矯正施設の文化祭の実行委員にスタッフから推薦され、「まじめに取り組む人がなくて困る」と語った。私は、「集団行動が苦手な子が多くいるから苦労するでしょう。困ったら切れたりしないで相談しましょう。そこで君の成長が見えると思います」と伝えると、Zは「先生とちょっと話したいんだよ」と答えた。

IV. 考察

医療の枠組みだけで子どもの反社会的行動を取り扱うことには限界がある。相談機関でコンサルテーションを求められた時には、私は矯正施設へ入所するマネジメントを行えば、一件落着と思っていた。私は、Zを一目見た時に以前治療に関わった犯罪を繰り返していた男性と生き写しで息

をのんだ。私にはZは家庭に戻ることであったことはまったくの予想外だった。相談機関での初回の面接で、Zは夢を報告した。私の診療は発達障害の診断・評価がほとんどだったので、夢を報告するZにひきつけられたのだった。Zが夢を報告した後に「身体が痛い」と話したが、私にはZがきょうだいにした暴力を心の痛みを心の痛みとして感じられずに、身体への痛みとして感じていると感じ、その理解をZに伝えた。Zは家庭に戻ってからはたがが外れたようになり、Zの言葉のあやに家族は崩壊の危機にさらされた。Zとの治療的な関わりは無力化され、まったくあそびがない状況に追いこまれた。私に火事のニュースが届いたのは、Zが感じている母親を奪われた強烈な怒りが家族を追いつめることが現実化していく知らせのようだった。私がおそれていたことは、ZというよりもZに似ていた犯罪を繰り返した男性の人を傷つけても痛みを感じない世界やあらぬ容疑をかけられるという世界にまきこまれる不気味な感じだった。Zが入所した矯正施設では、家族の話をしてはならないというありえないことも起こった。

そんな時に私は新しくZの担当になったスタッフと再会し、懐かしい感じがしてほっとした。そのスタッフは施設では家族の話をしてはならないということはまったく気にしていないようだった。そのスタッフのおおらかな態度によって、私に目の前にいるZをしっかりと見ていなかったことに気づかされた。私はどちらかという、相談機関が下した判断は誤っていたのでないかと腹を立てていたこと、そして家族が窮地に追いこむようなこと周囲に吹聴をしていたZに腹を立てていたことに気づいた。さらに私が感じていた誰を頼った方がいいのか、誰が言っていることを信じた方がいいのかまったくわからず、次にはいったい何が待ち受けているのかと深い闇に引きこまれていくことにひきつけられていたにも気づかされた。深い闇に引きこまれていく感じは、ZやZの母親がこれ

まで周囲の人との間でつきまとっていたものだったと思う。こうして、Zの家族の中で手つかずのことになっていた母親自身の問題に取り組むことや妹や弟の発達の問題にも改めて目を開かされてくることがつながった。

Zの治療がこれほど混乱したのは何が起こっていたのだろうか？私にはZは家庭に戻るということになったことはまったくの予想外だった。ウィニコット⁵⁾は、現実により環境を提供することによって治療できるのではないかと考えて、実際に非行少年を家で預かった。そのエピソードは、とんでもない混乱をウィニコット自身が憎しみを掻き立てられたことが述べられている。Zはなんとかその場をしのぐために嘘をつき、そして母親は混乱し、さらに相談機関や私が混乱をするということが起きていたのだと考えられた。私がおそれていたことは、Zがサイコパスなのではないかということだった。以前私が治療に関わった犯罪を繰り返している男性とZが生き写しのようにそっくりだったからである。私はとんでもない深い闇に引きずりこまれていくことをとにかく恐れていたのだと今にして思うのである。平井⁶⁾は、子どもの嘘に対する大人の態度、嘘がもつ、コミュニケーションの可能性について論じている。嘘には虚構の意味合いがあり、他者、とくに大人がどのように態度で受け止めるかによってその意義は変わっていくと述べている。通常、子どもが話す虚構としての嘘の多くを親や身近な大人は信じ、支持するこ

とが大切と言下に否定することはない。一方で、不健全な嘘、あるいは病理性を持つ嘘というものは、激しい道徳的非難と関係者の対立があり、こうした場合の子どもの嘘は反社会性や大人への憎悪という点で理解される。子どものそうした嘘にじっくりと耳を傾けていき、その独特の誇張や歪曲を差し引いていくと、驚くほど率直な願望やニーズ、そして大人への怒りや不満の気持ちが表現されていることに気づかされることが多いと述べている。虚言癖という問題の多くは、子どもの反社会性や破壊性という視点よりも、子どもと大人との間のコミュニケーションの破綻という視点から理解する方が、よりの確に問題を捉え、取り組むことができると考えていると述べている。Zは「先生ともっと話したいんだよな」と話すことがあったが、マネジメントに重点が置かれ、嘘に含まれている本音をくみとることがなされないと、そのコミュニケーションとしての可能性は消えてしまい、破壊的な面だけが維持されることにつながっていくのかもしれないと考えられた。

ただ、Zからお金をまきあげていた上級生の家の出火原因はわかっていない。これは令和の『X-ファイル』(著者註)となって、将来また何かの火の粉になるのかもしれない。私ができることは、できる限りZがどのような大人になるのかを見届けることなのだと思う。

文献

- 1) Winnicott, D.W. (1956) : The antisocial tendency. In: Collected Papers: Through Pediatrics to Psychoanalysis (pp.306-315). London: Tavistock Publications, 1958. (平野学訳: 反社会的傾向. 児童分析から精神分析へ—ウィニコット臨床論文集Ⅱ(北山修監訳). 岩崎学術出版社, 1990.)
- 2) Winnicott, D.W. (1956) : Delinquency as a sign of hope. In: Home Is Where We Start From (ed. C. Winnicott, R. Shepherd, & M. Davis.) London: Penguin, 1986. New York: W.W. Norton, 1986
- 3) Winnicott, D.W. (1984) : Deprivation and Delinquency. (ed. C. Winnicott, R. Shepherd, & M. Davis.)

London:Tavistock,1984.New York:Methuen,1984

4) 齋藤真樹子・細金奈奈：第3章 6「ペアレントトレーニング」．宮本益知・橋本圭司編，発達障害のリハビリテーション・多職種アプローチの実際，255-265，医学書院，2017，

5) Winnicott,D.W. (1949) : Hate in the countertransference.In:Collected Papers:Through Pediatrics to Psychoanalysis(pp.194-203).London:Tavistock Publications,1958. (中村留貴子訳：逆転移のなかの憎しみ．児童分析から精神分析へーウィニコット臨床論文集Ⅱ (北山修監訳)．岩崎学術出版社，1990.)

6) 平井正三：子どもの心理臨床における秘密と嘘－秘密をつける能力、嘘をつける能力．こころの科学、213、16-22、2020.

註：『X-ファイル』(*The X-Files*) は、1993年からフォックスより放送されているアメリカ合衆国のSFテレビドラマである。FBI 特別捜査官のフォックス・モルダーとダナ・スカリーが「X-ファイル」と呼ばれる超自然的な事件に挑む姿が描かれた。

講演記録：ウィニコット・フォーラム 2020「遊ぶことと言葉のあや」

言葉の生まれ来るところ

名古屋大学学生支援本部／心理療法室ともしび／NPO 法人風の家 工藤 晋平

「言葉の生まれ来るところ」というタイトルでお話してみたいと思っています。講演のお話を聞いてからの時系列がどうだったかも覚えていませんが、今年は緊急事態宣言がありました。本当に皆さんいろいろ大変な中でこの1年間過ごされてきたと思いますけれども、その、春先に、家にいるし、時間もあるし、ということでもいつもは手に取らない本を読んでみようと思いました。手に取ってみたのが、『文学理論』という本で、文学とはどういうふうに学問なのか、ということを知りたくて、手に取ってみたわけです。当然精神分析の視点から文学を理解することについても書かれていますけど、その中にすごく印象に残ったもので、李良枝(リ・ヨンジ)という作家の『由熙(ユヒ)』という小説がありました。これを読んでここから今日の講演を考えることになりました。

どういう話かご紹介すると、韓国に留学をしてきた在日韓国人の由熙という人と、その下宿先にいたお姉さん、オンニ、お姉さんっていう意味みたいですが、そのオンニ、それからオンニのお母さんっていう3人が登場人物のほとんどで、だけど物語が始まったところではもう由熙はいなくなっていて、回想を中心に物語が組み立てられているというような構造になっています。印象深かったところ、文学理論の中で取り上げられていたのは、由熙とオンニとが会話をしている場面です。

—オンニ

—何？

—オンニは朝、目が醒めた時、一番最初に何を考える？

由熙が訊いた。

答えが急で思い浮かばず

—あなたは何を考えるの？

私の方が聞き返した。由熙の答えが聞きたくもあった。

—考えって自分で言ったけれど、考えと言うのとも実は違うの。

由熙はそう言って不意に口をつぐんだ。言葉を続けようかどうかと迷っている表情だった。少ししてまた口を開いた。

—あれはどう言ったらいいのかなあ、目醒める 寸前まで夢を見ていたのか、何を考えていたのか、よく思い出せないのだけれど、私、声が出るの。声って言ってもいいのかなあ。ただの 息なのかなあ

—どうということ？ 私は訊いた。

—ア—って。こんなにはっきりした声でもなく、こんなに長い音でもないものが口から出てくるの。

思いもかけなかった答えに私は笑った。そうでしょう、オンニ、おかしいでしょう、と笑って続けた。

それから少し間を飛ばしてですけど、また喋り始めます。

—ことばの杖。

—……………。

—ことばの杖を、目醒めた瞬間に握めるかどうか、試されているような気がする。

—……………。

—아なのか、それとも、あ、なのか。아であれば아、ㅏ、ㅑ、ㅓ、と続いていく杖を掴むの。でも、あ、であれば、あ、い、う、え、お、と続いていく杖。けれども、아、なのか、あ、なのか、すっきりとわかった日がない。ずっとそう。ますますわからなくなっていく。杖が、掴めない。

由熙は、ことばの杖、とも言い、ことばからなる杖、とも言い換えた。

こんな一節です。韓国の言葉と日本の言葉が「あ」でこういうふうに重なるということも、実は知らなかったんですけども、なるほどそうかと思ひまして。プリミティブな言葉が一つの言語に変わってゆく、その分かれ道みたいなものがどこかにあるんだなということを思ったわけです。言葉はどこから生まれてくるのか、ということの関心に惹かれてこの本を手にとったわけです。

1. 象徴の位置する移行空間

今日お話をしてみたいと思っているのはそのことについての、ウィニコットを参照しながらの理解です。1つ目として象徴としての言葉ということについて触れたいと思います。言語というものは、一般に精神分析の中でも、象徴として、あるいは象徴化という作用の1つの生成物として扱われているように思います。ウィニコットの文脈で言葉がそれほどしっかりと扱われているところは、私が理解してる範囲ではあまりない気がするんですけど、象徴についてはいろいろなところで使われているように思います。この象徴が可能になるというのは、移行現象の後、移行空間の中でもあるし、でも発達段階としてそれを通過したところで象徴というものが使われる段階に入っていく、そういう位置づけであるように思います。

この移行空間あるいは移行現象、中間領域、ポテンシャルスペース、色々な言葉で表される心の

領域では本当にたくさんの方がウィニコットによって語られていると思いますが、その導入というか、その位置づけというものは、こんなふうに始まっているように思います。

対人関係の観点からの人間の本性の説明……十分なものではないことが広く認識されている。……また違った人間の記述のしかたもあり、……単一体となる段階に達したすべての個人について、その個人には内的現実があると言うことができ、それは豊かにも貧しくも、平和にも戦争状態にもなりうるような内的世界である。

この考えは役に立つが、はたしてそれで十分だろうか？（ウィニコット『改訳 遊ぶことと現実』）

と問いかけます。

私が主張したいのは、

ちょっと英語の理解が違ったのでそこは変えていますが、

もしこのような2つの表現の仕方が必要だとすれば、3つ目も必要だということである。すなわち、落としてはならない人間の生活の第三の部分は、内的現実と外的生活の両方が寄与している体験することの中間領域である。

これは疑義を突きつけられることがない領域である。なぜなら、この領域に求められることといえば、内的現実と外的現実を分離しつつも相互に関係させておく、という永遠の人間の課題に取り組む個人にとって、それが休息の場として存在すること以外にはないからである。（同書）

こういう形で中間領域、移行現象、移行空間、ないしはそこでの移行対象というものをウィニコットは導入します。

つまり人間の本性というものを考えるときに（ここがウィニコットの文章の私なりの理解なのですが）、対人関係というものと内的世界というものの2つがあると言った上で、だけれどもこの間に、あるいは第三の独立したものとして、移行現象というものを考える必要があって、なぜなら内的世界が、したがって外的世界が出現するということが可能になるからである、このことがよく研究される必要がある、というのがウィニコットの立ち位置なんだろうと思っています。ここは舞台として外的と内的のどちらでもない第三の体験の領域であるわけです。午前中のシンポジウムで鈴木先生から解釈か遊ぶことかかっていう質問がありましたけど、私なりの理解は、体験することに向けて解釈が素材として活かされることもあれば、遊ぶことが行われることもあって、介入のものさしというものがもしあるとすれば、それは体験が十全であるか、それがリアルであるか、ということなんだろうと思っています。これが起きているのが中間領域だとウィニコットは言っているように思います。

ここでは本当に多くのことが言われていますが、

- ・関係することから使用することへの関係性の変化
- ・したがって私でない所有物の成立
- ・それから主観的な対象から客観的に知覚された対象への移行
- ・それと主観的な統覚から客観的な知覚への移行、それが始まること
- ・情動として無慈悲から思いやりへ
- ・あるいは憎むことが発生すること
- ・そして自己が無定形から形を成していくこと
- ・ないしは偽りの自己の発生もまた生じること

というようないくつものことが並べられて、一人

の赤ん坊という一つのユニットを形成するように至るといふように述べているように思います。

移行という言葉が示すように、ある状態「から」ある状態「へ」の移行ということをウィニコットはここでずっと想定をしています、これを可能にする対象の働きについては環境としての母親と対象としての母親という言い方をしています。つまりここは「と」で結ばれていて、この両方が同時に存在しているということがある状態からある状態への移行を可能にしている、この両方が同時に差し出されているってということが一つ大きな特徴をなしているということもあるのかなと考えています。

この無定形ということについて、最近関心を引かれるんですけど、『もこもこもこ』という絵本をご存知の方もいらっしゃると思います。この本については作者、作者というか文章を書いたのが谷川俊太郎ですけども、谷川俊太郎による朗読があって、そちらをお聞きいただくことをお勧めしたいところです。無定形って私にとってはこんな感じです。何が起きているか分からないけれども、何か起きていて、そして何かが終わって行って、また何かが始まっていく。これを周期と言ったりリズムと言ったりすることもできるけれども、そういうものであって、そのようにして自己というのは原初の形を持っているんだ、ということをウィニコットは言っているように思います。

余談ですが、この本の成立のエピソードもちょっと面白いものです。作品自体は絵を描く元永定正と文章を書く谷川俊太郎の二人の合作ですが、その結果でき上がった本作を、出版社が売り物になると判断したわけです。これを作ろうとした二人のすごさとともに一番凄いかもしれないと思うのは、この意味の分からない本を企画して、これでいきましょうと売り出した出版社ではないかと、つまりこれが環境であるし、この企画を使いながらこの絵本が生まれたのだと思います。それがつまり「母親」とウィニコットが呼ぶ対象の立

場、母親の役割であって、ここが移行現象の起きているところであり中間領域にあたります。出版というものがどのように文化の担い手であるのかってということがここに表されてるんだらうなということも考えたりもします。

戻りますけど、原初の自己はこのような遺伝的な傾向をもって体験の世界に生起して活動して消える何か、何かとしか言いようのない何かなんだと思います。その自己と関わる原初の対象というのは、原初の自己の自発性を支えて手応えを与えるもの、というふうに考えてみる事ができて、この絶え間ない繰り返し、その連続性の中で、

乳児の発達においては、遅かれ早かれ乳児の側に、自分以外の対象をパーソナルなパターンへと織り込んで行く傾向が出てくる(同書)

というふうにウィニコットは言っています。

つまり例えばさきほどの絵本で「もこ」って出てきたものが「ぱく」ってやりますけど、「ぱく」ってやっているものを例えば「食べる」というふうに理解をして、お腹が空いて食欲な食欲を持った自己が生起しているというふうに解釈してみることもできます。そこに「によき」って現れてきたあれを「乳房」として解釈することもできるかもしれません。この乳房は、だけどもそこに生起した対象であって、これは作り出され見つけ出されたものだというのが、移行対象のウィニコットの定義なんだろうと思います。それが「ぱく」って食べられるわけですけども、これが美味しいものであるのか美味しくないものであるのか、食べるのか食べないのか、この「によき」って出てきたものを見つかるのか見つかないのか、そういう世界の中で起きていることが、実はこの乳児を取り扱っている母親の取り扱いを反映していて、そのパターンが、そのやり方が、自己の生成に寄与している、単に寄与しているだけじゃなくて、自己の生き方として、プロセスとして組み込まれて行くん

だということを言っています。つまり「によき」と現れたものが食べられるものなのか、むしろ襲いかかってくるものなのか、ということは、対象の状態を反映しているのであって、その対象の在り方を含んで自己は成立するという事なのだと思えます。

これを受けてボラスはこんなふうに言っています。

ウィニコットは、このような包括的な母親を「環境として」の母親と名づけた。というのは、乳児にとって、母親が環境の全体だからである。私がこれに付け加えたいと思うのは、母親は対象としてよりもひとつの過程としてより意義深いのであり、そのように同定されるということである。

.....いまだ他者としては完全に認められないうちに、母親は変形の過程として体験される。
(ボラス『対象の影』)

という事がボラスの最初の著作である『変形性対象』の中で書かれています。

ウィニコットはいつもクラインとの対話が念頭にあったように思うんですけども、内的世界で起きている空想は乳児のもともと持って生まれた気質的なものを反映しているだけではなくて、それを例えばお腹がすく、そこでどれくらい乳房求めるかっていうその傾向を、母親がどうやって抱え、どうやってこれに応え、どうやってあやし、どうやって乳房を供給するか、そのやり方、そのプロセスとして母親が存在している、それが取り入れられていく、これが部分的であれ全体的なものであれ、したがって乳児がその乳房を欲しがると解釈される) ことを母親がどのように見ているかどのように感じるか、ということが乳児に映し返されていって、それが乳房との内的な対象関係に反映されていく、もしくはその内的な対象関係を

形作っていく、というようなことを言っているのだと思っています。

ここにわりと抜き差しならない関係が、というか抜き差しならない出来事ができてくるのは、ほどよい母親との関係であれば乳児は十全な自己を発達させていくことができるけれども、どこかにその関係に損傷があったり、どこかに母親の羨望があったり、どこかに母親からの憎しみがあたりすると、体験の所々にそれが挟まれて行って、自分の願望が憎しみの対象になる、自分の求めている対象が醜いものになる、あるいはとても手の届かないものになる、そのような世界が形成されていくということがあるのだらうと思うんです。

この痕跡が、例えば自由連想の中に浮かび上がって来る、ということボラスは言っていますけれども、それは移行現象についての話です。

もしも言語というものが1つの象徴化の過程としてこの現象を通過した後に現れるのだとすると、言語もまたこのように1つの関係性の中でプロセスとして取り込まれるのではないか、ということを考えることができそうです。他者の言葉が取り組まれ、パーソナルなパターンに取り込まれていく、私がこうして喋っているこの言葉の選び方、響き、あるいは言葉の選択ってというのは、どこか私の母親や私の父親が私の心を扱ってきた言葉に左右されているのではないか、と考えることができるということです。

それは、気付かれるよりも前から既に言葉との関係は存在していて、いつしか言葉が使われるようになって行く、そういう過程を想定することができそうだと思う、ということです。その取り入れられ方、使い方、ある言葉が自分のものとして心を表していく過程というものの全体が、変形性対象による影響を受けているというふうに考えることができそうだなと思っています。

つまり言葉が持つ響きや雰囲気の中に、原初の、あるいはその後の、対象関係が反映されている言うことができるのではないか、ということ

です。話は言葉の対象関係論という領域に進んでいく、っていうのが、今日の1つのテーマです。

2. 言葉の対象関係

言葉について精神分析の中で最初にこれを重視して取り上げたのは、もちろんフロイトですけれども、それは解釈というものが言語によって行われる、というところに顕著です。このことが扱われるのは『無意識』という論文の中なんですけれども、こんな一節があります。

われわれは今、突然、何によって意識的な表象が無意識的な表象から区別されるのかが分かったという気がする。

.....意識的な表象は、物表象と、それに属する語表象とを含んでおり、無意識的表象は、単に物表象なのである。Ubw系は、対象の物備給、すなわち初めの、本来固有の対象備給を含んでいる。Vbw系は、この物表象が、それに対応する語表象との結びつきによって過剰備給されるということによって、発生してくる。(フロイト「無意識」)

ちょっと難しい言い方ですし、この当時に使われてる表象という言葉とか概念化の仕方と今のとは少し違うところがあるので、そのギャップを埋めながら話を進めるのも難しいところはあるんですけども、例えば乳児がおっぱいを飲むということがどういうふうに行われているかについては、その記憶として仮に蓄積されるとして、でもこれが意識される、どういうふうに母親は自分を扱ってきたのか、それは自分にとってどんな体験だったのかが意識されるには、言葉と結びつかなければいけない、ということが言われています。これが解釈だというふうに位置づけることもできるんだと思いますけれども、言葉がないと、語表象がないと意識化はされない、という形で言葉とい

うものが扱われています。

なぜ言葉なのか、ということについてあまり私は理解できていないんですけど、少なくとも心理学草稿、草案にまで遡って考えることはできそうです。心理学草稿は本当に読むのが骨が折れるものなので、全くもって十分に理解できていないんですけど、こんなことが書いてあります。これは思考というものが生まれるだろうという時に、この思考には単純な思考と観察をする思考というものがあるだろうという話をした中でのもので、おそらく単純な思考というのは無意識的な連想だと考えて良いと思います。それに対して観察をする思考はその連想を認識することです。

観察する思考の意図には明らかに、知覚対象を余すところなく知ることができるように、Wから延びる諸経路を可能な限り遠くまで知るといふことがある。……そのために思考は〔新たに〕到達した想起像に対し……またもや ψ 備給を必要とするのだが、同時にそうした備給を正しい箇所へと導くような機制も必要とする。

……それはそれで質的指標を前提としている。
……その仕組みは次のようなものに見える。
(フロイト『心理学草案』)

Wというのは知覚としての入力で、経路はニューロンの連鎖のこと、質的指標は意識化をもたらす要素です。

質的指標は正常ではWからのみ到来する。したがって $Q\dot{\eta}$ の経過に（〔 ψ ニューロン間の〕循環以外に）ある放散が結びついているとすれば、運動がいずれもそうであるようにこの放散が運動の情報を提供するであろう。

……Qの経過中に運動性ニューロンも備給さ

れ、するとそれが $Q\dot{\eta}$ を放散し、質的指標を提供するということである。……備給はすべてが運動性というわけではないので、この目的のためには運動性ニューロンと確かな通道を有する状態になっている必要がある。（同書）

Qというのはエネルギー量のこと、外界の刺激によって生じる知覚のエネルギーです。 $Q\dot{\eta}$ というのは身体内部で発生するエネルギーで、例えばお腹が空くという刺激で生じるものです。通道というのは現在でいうシナプス結合のようなものだというふうに理解しています。

この目的を満たすのが言語連合である。言語連合は本質的には、 ψ ニューロンと、音表象を担当し、それ自身も運動性言語像との緊密な連合を持つニューロンとの結合である。……音像から興奮がどの場合でも語像に達し、語像から放散へ向かう。

……ここで自我が、かつて〔知覚の際に〕 ω の放散像に対して前備給したのと同様、これらの語像を前備給したとすると、自我は、 ψ 備給を $Q\dot{\eta}$ の経過中に浮上してきた想起へと向ける機制を手に入れたことになる。これが意識的で観察する思考である。（同書）

何を言っているかということ、すごく大雑把に私なりの理解をすると、まず話の前提として、外界で生じたことは外受容的に知覚される、これがWですね。これは ϕ 系という神経系で生じ、このエネルギー量がQです。このエネルギーの流れは ψ 系に到達します。ここは記憶の場であって、ここに自我があります。けれどもこの時点では知覚は無意識です。これが意識になるには量が質に転換される必要があります。エネルギーが視覚や聴覚という質を備える必要があります。これを可能にするのが ω 系という第三の神経系です。 ψ に

到達した Q には量とともに周期がそなわっていて、その周期の方が ω に伝達され、それに応じて ω からエネルギーの放散があります。これが再度 ψ 系に伝わると、これが質的指標となります。ここに意識的な知覚が生じるというわけです。

ここまでの前提なのですが、 W が ψ 系に到達するためには Q が ϕ 系から ψ 系に移動する必要がある、それが途中で終わったのでは困る、通道が、つまりニューロン間の結合が成立しているだけではなく、 Q が流れやすくなっている必要がある、そのためにエネルギーが少しだけ備給されていて、 Q が通りやすくなっている必要がある、これが前備給と呼ばれるものです。これは心理学的に注意と呼ばれる状態でもあります。この前備給に使われるエネルギー量は身体の内部から備給されるので $Q\dot{h}$ になります。外側からの刺激、例えば母親が目の前にいる、そうするとこの W の Q は、前備給されていた $Q\dot{h}$ と一緒になってニューロンの経路をたどり、最終的に ψ 系に記憶されているもの、つまり想起像にまで到達する、というわけですね。それは過去の母親との経験であり、それにつながる印象、観念、情動の表象などに広がるかも知れません。ここまではやはり無意識の知覚と想起の話になります。

さてこの印象や観念、情動という、視覚像のような知覚ではない心的なものがどうやって意識化されるかという、外的知覚の意識化と同じように、やはり ψ 系にある $Q\dot{h}$ の備給が必要で、それを想起された像に向ける必要があるわけです。知覚の場合には Q の周期が ω に伝わって、そこからエネルギーの放散があり、これが ψ 系で意識になるわけですが、心的なものについてはフロイトは ω 放散というものを考えていませんでした。というのは ω は W からのみ到達できるからで、これは多分、視覚からの Q は視覚野の ω 系に到達するというようなことを考えていたからだだと思います。心的な観念や情動は視覚や聴覚とは違うため、これらの ω 系には伝わっていきません。そうすると、

$Q\dot{h}$ が想起象までたどり着く経過の中で ω 系の代わりのところからの放散が必要になってきます。これをもたらすのが言語連合だとフロイトは言うわけですが、 W が連鎖的に（連想的に）想起象までたどり着いた時、もしもその想起像が音表象と語表象に結びついていると（これが連合ですね）、つまり、例えば母親という外界の刺激に対して過去の母親との肯定的な経験が想起され、それと連合している「ははおや」とか「すき」という音の像と「ははおや」とか「すき」という言葉の像（ややこしいのですが語表象とは発音の運動像を指しているようです）、音の表象と筋肉運動の表象ですね、これが喚起される、というわけです。で、この筋肉運動表象がエネルギーを放散する、その放散されたエネルギーが ψ 系にもう一度たどり着く、そうすると母親と母親に対する愛情が意識化される、と言っているのだと思います。これによって想起像の意識化が可能になるし、これによって何が想起されたのかが観察されたことになり、認識されたことになる、というわけです。

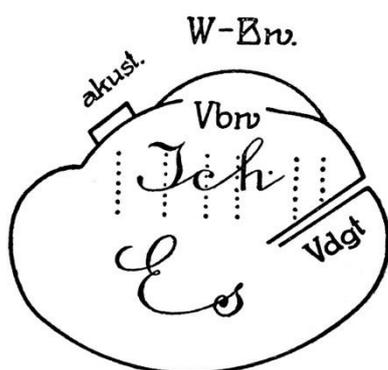
言葉を変えれば、フロイトにとって無意識のうちに進んでいく連想が認識されるには、言語の獲得を待たなければいけないという、そういう理論でもあるんだと思います。つまり乳児にそれほど心的機能を持った一人の人間としての動きを見ていない、これはフロイトとフロイト以降で大きく違うところなのではないかというふうに私は思っていて、物事に付随する印象や観念を認識したり、その操作が行われたりするの、言語的なものと結びつかなければ行われぬ、というふうにフロイトは考えていたようです。

なぜ言語なのか、というのは運動と結びついて ω 放散に等しい放散を可能にするから、という点で分かるとして、言語でなければいけないのか、という点に関してはよく分かりません。研究者の中にはこの言語の重視はフロイトが失語症の研究をしていたことと関係するんじゃないかと言っている人たちもいるようで、そうなのかなと思って

います。何にしても、それだけ言語というものは心の成り立ちにかなり特権的な地位が与えられていた、と言うことができそうです。

そうするとこの音表象と語表象はどこから入ってくるのかっていうことが次の疑問として浮かんできます。大丈夫でしょうかね、私は心理学草案の今の部分ぐらいで3時間ぐらい一人で遊べそうな気がするんですけど、私の遊びで皆さんがついてこれている感じはあんまりしなくて申し訳ありません。でも分かっていたいただければ良いと思うのは、言葉というものがそれだけフロイトにとってとても決定的なものだったっていうことと、でもこれがそれ以降の精神分析の中では決定的に転換してるところで、前言語とか非言語というものが考えられるようになるということは、精神分析にとってそれだけラディカルなことだったのではないかっていう、そんなことです。

フロイトに戻りますが、この言語連合のものがどこからやって来るのかっていうと、外側からです。つまり、この音表象と語表象というものは記憶痕跡、想起痕跡だということをフロイトは言います。それを発展させるのが『自我とエス』という論文の中でなんですけど、この『自我とエス』の中にこのような図があります。



構造論としてよく知られているものは、エスがあって自我があって超自我があるものなんですけど、その前の段階としてこの図があります。自我は心の中で起きている、先ほどの知覚のための装置として定位されています。エスが活動していて、エス

そのものは知ることができない、でもエスの活動として起きてくるもの、それと色々な表象が結びつく、それを知覚するものとして自我が成り立っているけれども、それはここに音表象と語表象が結びつくことでようやく意識化をされる、そういうモデルです。ちなみに、音表象と語表象に分かれていた言語連合は『自我とエス』の中では語表象の1つだけで語られています。

この図にひとつだけ外側に向けた器官があります。これ日本語では聴覚帽と言われているものですが、

この語表象とは、思い出-残渣のことである。……語残渣は、本質的には聴覚による知覚に由来するものであり、そのため前意識系には、いわば特別の感覚源が与えられている。

抑圧された物をどのようにして（前）意識化することができるかという問いには、こう答えることができる。すなわち、分析作業を通して、この種の前意識的な媒介項を作り出すことによって。（フロイト『自我とエス』）

つまり、言語化をするということが意識化の1つの、1つのというか主要な方法であるということをフロイトは言っているし、その時に使われる言葉、語表象は外側から取り入れられたものだっていうことをここで言っているんだと思うんです。それはそうだな、と、乳児がひとりで言葉を作り出すわけではないので外側からの言葉を使ってももちろん乳児は言葉を使うようになるし、私達はそうやって言葉を獲得しています。でもそうすると、これって取り入れられたものですよ、というふうになりますね。フロイトはエスのあるところに自我あらしめよ、と言うわけなんですけど、それは語表象に結びつけることで行われるんだと言う。この語表象は取り入れられたものなんだっていうことをここで述べています。

そうすると、これって精神分析における最初期の対象関係論なんじゃないかっていうことを最近考えたりするわけです。たとえば子守歌というのが部分対象、あるいは移行対象になるとすると、そもそも言語というものが関係を取り結べる対象となるのではないか、ということを考えられないか、ということです。対象関係論の始まりとしては、しばしば『悲哀とメランコリー』あるいは『喪とメランコリー』と呼ばれる論文が取り上げられていて、自分の親に対するアンビバレントな情動が向かっているところ、これを喪失することで対象を体内に取り入れて、ここにアンビバレンスが向かうので、メランコリーにおいては自分に対する自己愛的な備給と攻撃性の備給が生じ、その結果としての誇大な罪業感が高まるんだという、そういう論の中で、取り入れの話、同一化の話、対象関係論が展開していると言われるわけです。でも語表象が外側から取り入れられたものであるということになると、この語表象というものが1つの部分対象としてやってきて、この部分対象を提供している環境というものが、非常に大きな意味を持っているというふうに考えることができるのではないか、『喪とメランコリー』よりももっと古い時代に、じつは言葉の対象関係論があると考えられるのではないかっていうことを思っています。

そのように考えるとボラスがさっき述べた言葉の意味というのはもっと重要になってきます。つまり「ウィニコットは、このような包括的な母親を「環境として」の母親と名づけ」、これは「ひとつの過程として」「より意義深い」、つまり母親という過程が、願望や希望や不安やその憎しみやそういうものをどうやって処理するかっていうことに関わっている、この処理過程に言葉が提示され、それが取り入れられて組み込まれたり、あるいは取り入れられずに排泄されたりする、言葉が母親のあやしや取り扱いのように心を取り扱う、そのような陰影が連合する、というようなことが、ここで起きてくる、「いまだ」言葉として「完全に認

められないうちに」この部分的な対象としての言葉ってというのは「変形の過程として体験される」、そういうことが起きるんじゃないかということを考えられそうだなと思ってます。人は言葉を使う前から言葉に包まれ、母親という対象が自己の心のプロセスの一部となるのと同じように言葉もまた自己の心のプロセスの一部となっている、ということです。母国語は外国語よりも心とより深く結びついて経験されますが、それがなぜかということはこの辺りに理由があるのではないのでしょうかね、ということも考えたりします。

ですので、ともかく最初の語表象は部分対象と言えるでしょうし、それは環境としての母親と関係することの中で経験されるし、したがってこれを「環境としての言葉」と呼んでみるができるのではないかと思ったりします。子どもは遠からず「対象としての言葉」に出会うようになっていって、やがてそこで言葉が「使用」される段階に達するのだろうと、このとき無定形の心に形が与えられるのでしょうか。ここで意識化への道が開かれるって言えるかどうかちょっと分かりませんが、フロイトに倣えばそうなります。

ここには前言語的なコミュニケーションから言語的なコミュニケーションへの進展があります。が、これが生じるためには（フロイトはこれを想定しなかったわけですが、でも現代の対象関係はこれを想定していて）、これが生じるためには環境としての言葉と対象としての言葉が同時に差し出されていることが必要である、この差し出され方によって言葉の陰影、言葉が心を意味する機能というものが大きく影響を受けるのではないかと、少なくともそう理論的には考えられることができるかなと思っています。

この話が聞いておられる皆さんにとってどれくらい意味のある議論なのか、今さらながらちょっと分からないですけど。

冒頭で挙げた『由熙』という小説の中は、在日韓国人であるということの問題を言葉の中で取り扱

っているというか、言葉を通して取り扱っているというふうに理解ができる小説なんですけれども、言葉に関してこんな一節があります。引用する箇所の前に、私は嘘つきです、私は偽善者です、って言って、オンニに大泣きする場面というのが書かれます。そこではノートいっぱいウリナラってというふうを書くという描写があります。ウリナラってというのは、母国、我が国って意味ですけど、少しあってこんな描写があります。

—もうどうあっても、こんなこと、終わりにしなければ……。우리나라(母国)って書けない。今度の試験が、こんな偽善の最後だし、最後にしなくてはいけないと思う。中世国語の、訓民正音の試験だった。答案用紙を書いている、そのうちに우리나라と書く部分にきて、先に進めなくなった。前にもそんなことはあったけれど、でも今度のは手が凍りついたみたいに 全く書けなくなってしまった。

という、そういう一節です。ここに在日韓国人としての強い葛藤、苦しみみたいなものがあって、ある言葉が使われなくなってしまふ、使うことができなくなってしまふ、っていうようなことが生じていることが伺えます。

これについて、もう少し経つと説明が行われます。1つの説明になるんだろうと思うんですが、ここまでのところはオンニと呼ばれるお姉さんみたいな存在との会話でした。このオンニにはお母さんがいて、その人が由熙の下宿の持ち主で、由熙はこのお母さんとは、もう少し心的に意味のある話ができたいみたいなんですけど、そのことを由熙がいなくなった後で、オンニとそのお母さん二人で話し合ってる場面があります。そこでの会話です。アボジは父、オモニは母です。

—あの子のアボジは、あの子が中学を卒業する頃、事業に失敗したらしいの。それも同じ

同胞の韓国人に騙されてそうなったんだと言っていたわ。詐欺に遭ったらしいのね。それでも由熙のオモニの実家は経済的にしっかりとしていたらしくて、実家からの援助を受けてずっと暮らしていたらしいけれど、由熙のアボジは韓国人を悪し様に言い続けて、そして亡くなったらしいわ。ひどい話があるものね。

っていうことを言います。

—いいアボジだったけれど、韓国人の悪口を言うアボジを見るのが、一番辛くていやだったって言ってたわ。大学に入ってから、由熙はたったひとりでハングルを習い始めたらしいの。そして大琴の音を聞く機会が偶然あって、大琴の散調を聴いて留学することを心に決めたんだって。……アボジが死ぬ前に、この音を聞かせてあげたかったって、そう言って涙ぐんでいた。

……

—一番素朴で、正直な楽器だと思うって、由熙は言った。口を閉ざすからって、口を閉ざすから声が音として現われる、とも言っていたわ。

そういう一節です。これをどういうふうに解釈するか、あるいはこれをどういうふうに理解するかっていうことは、小説ですのでそれぞれに味わっていただければいいんだろうと思いますけれども、こんなふうにして環境の中で起きていること、環境との関わりで起きていること、決して言葉そのものがただの言葉として観念を表象するのではなくむしろ観念を表象する言葉との関係が苦痛に満ちていることで、言葉を表象する過程そのものに痛みが伴い、その陰影によって言葉を使えなくしてしまう、そのような言葉と関係し、これを使用する領域があることが示されているのだと思います。健康な発達の中であれば、言葉の使用を洗練

させること、ウィニコットの言う *imaginative elaboration* が起きてくるんだというふうに考えてみるができるんじゃないかと。

「アー」という音がある。それが苦しみに満ちている。そういう環境としての言葉が由熙を取り囲んでいる。そのために「アー」という言葉と由熙との関係は苦しみに満ちていて、移行段階を超えて行けない、言葉を使用することが出来なくなる、記憶像としては 우리나라 は内在化されているけど、でもそれは使える言葉ではなくなってしまう。そうした結果として「アー」という言葉が日本語としての「あ」なのか、韓国語としての「아」なのか、日本人としての自分なのか、韓国人としても自分なのか、それは統合されても良さそうなのにどちらにもならない、どちらの形にもならない、無定形の状態から形ある状態に到達できない、そういう苦しみがあるのではないかと思います。そういうところに関心を惹かれてこの小説を読んだのかなと思ったし、この小説に導かれてたどり着く「言葉の生まれ来るところ」の理解というのはこういうものなのかなと思いました。

3. 遊ぶことと言葉の成立

これが遊ぶこととどういうふうに結びついていくのか、あるいは遊ぶことというのがここにどのように関わってくるのかっていうことを最後に触れて終わりたいと思います。遊ぶことに関するウィニコットのとても有名なステートメントです。

心理療法は、患者の遊ぶことの領域と、セラピストの遊ぶことの領域という、ふたつの遊ぶことの領域の重なり合いのなかで起こる。心理療法は、一緒に遊んでいるふたりの人々に関わるものである。このことから必然的に、遊ぶことが不可能なところでセラピストが行う作業は、患者を遊べない状態から遊べる状態へともっていくことに向けられる。(ウィニコット『遊ぶことと現実』)

というふうに書いています。『遊ぶことと現実』の中には「遊ぶこと」という章が2つあって、1つは理論的なもの、もう1つは創造性に関わるもので、どちらにも実は同じようなことが書いてあります。こういうことがあるからウィニコットの書いていることってどこに何が書いてあったか、私の中にあんまり残らないんだなって最近思ってますが、その同じような文章です。

心理療法はふたつの遊びの領域の重なり合い、つまり患者とセラピストの遊びの領域の重なり合いのなかで起こる。もしセラピストが遊べないとしたら、その人は心理療法に適していないのである。もし患者が遊べないならば、患者を遊べるようにする何かが必要であり、その後心理療法が始められるのである。
(同書)

こちらの方が年代的には古かったと思いますけれども、何にしてもそういうようなことが書いてあります。つまりフロイトが言語的なものに、解釈に、意識化することに特権的な地位を与えて、クラインがプレイセラピーのテクニクというものを見出して、だけれどもそれは ψ 系の想起像が運動に変わったものと同視されて、解釈というものにフロイトと同じような重要性を与えていて、ということがあるときに、それとは対照的に、ウィニコットにとってセラピーというのは遊ぶことが成立することだ、もしくは遊ぶことが成立した後でようやく始めることのできるものだっていう、言葉ではなく自由連想することそのものとも言える遊ぶことへの特権的な地位の付与をここに見ることができると思います。

何故そうなのか、

遊ぶことがなぜ不可欠なのか、その理由は遊ぶことの中でこそ患者がまさに創造的になっているからである。

遊ぶことにおいて、そして遊ぶことにおいてのみ、子どもでも大人でも、個人は創造的になることができ、パーソナリティの全体を使うことができる。そして、個人は創造的になることのなかでのみ、自己を発見するのである。(同書)

「もこもこ」って立ち上がって、「ぱく」として、「ぷう」ってして、「ぱちん」となって、「ひゅう」ってなって、それが何を意味するか分からなくても、それが生起する、それが終わる、その一連の過程が自己であり、それが生じることを通してのみ自己は発見されるっていう、そういう話をしているんだと思います。

人生は生きる価値があると個人に感じさせてくれるのは、他の何にもまして、創造的な統覚である。(同書)

ウィニコットはこの「統覚」という言葉を「知覚」という言葉と対比して、移行現象以前の段階のものとしておいていますがけれども、つまり外界も内界もないような状態で創造的であることというのが生きる価値があると人に感じさせるものなんだというふうに言っています。

これと対照的なのが、追従という外的現実への関係性であって、そこでは世界とその細部がただ合わせるべきもの、または適応を要求してくるものとしか認識されない。(同書)

これが偽りの自己の話に繋がる部分です。

私たちが援助しようとしている人に必要なのは、特殊化された設定のもとでの新しい体験なのである。(同書)

体験なんだっていうふうに言います。つまり、理解や洞察、洞察を重視する言葉もウィニコットの初期の頃にはあるんですけど、段々洞察という言葉も使わなくなって、必要なのは体験なんだっていうふうに言っています。

それは、無目的状態という体験であり、つまり、無統合のパーソナリティがアイドリングしているようなもの、と言えるかもしれない。私はこれを無定形と呼んだ。(同書)

そんなふうにして遊びというものが原初の自己の成立というものの大きな舞台になるということを行っています。

ここで、クラインとの比較を通してより遊ぶこの位置を明確にします。

当然ながら、メラニー・クラインの著作に目を向けることになるが、遊びに関してクラインが著作のなかで述べたことは、ほとんどが遊びの利用についてであった。.....これは決してメラニー・クラインへの批判ではない..... ただ単に、パーソナリティの全体的理論のなかでみれば、精神分析家が遊びの内容を利用することに忙殺されるあまりに、遊んでいる子どもに目を向けたり、遊ぶことそれ自体について書くことがなかったという可能性について言っているに過ぎない。(同書)

つまり、ウィニコットにとっては遊びの中身、ないしはこれが自由連想であるとすれば、自由連想の中身が重要なのではなく、自由連想になっているのか、どのように自由連想をしているのか、そのことがとても重要であって、中身が最も重要なわけではない、遊びの中身に対する解釈が行われるとしても、それはむしろ遊ぶことの一要素で、ここでの新しい体験が十分になされているか、これが深まりを持っているかどうか、そちらの方が

むしろ重要なことなんだ、これは精神分析だけではなく生きることに重要なんだ、というふうに言っています。

私たちの仕事を理解する上で知っておくと役に立つのは、私たちがすることの基本が、患者の遊ぶことであり、それは空間と時間をとる創造的体験であって患者にとって強烈にリアルだということである。(同書)

リアルであるということが、重要だというわけですね。

例えば由熙の小説を1つの事例として考えたら、우리나라という言葉を経験できることが重要であって、例えばそれは相変わらず苦しみに満ちているかもしれないし、苦しみに満ちているかもしれないし、引き裂かれそうな自己がそこにあるかもしれないけれども、それでもそのことが語られる、まあ、言葉なので語られざるを得ないですけども、リアルに語られるということが起きる、そのことが重要であって、それが苦しみに満ちているか苦しみに満ちてゐるかは重要性としてはセカンダリなものだということにウィニコットは言っているのだと思います。

これが遊びであると、それはリアルであって、パーソナルであって、ここに発見が含まれていて、創造的であって、当然その中にある自己の状態は無定形で、けれども *aliveness* が含まれていて、*true* であって、それから狂気があって、そういう逆説が含まれている、そういうものだということに言っているようです。

このことをもうちょっと違う言葉で言うと、私たちは遊ぶことということ何か楽しいことや面白いこととして想定しがちですけども、少なくとも私のウィニコット理解、ないしはウィニコットが言っていることについて私が受け取ったものとしての遊びの理解というのは、そんなに面白かったり楽しかったりすることだけではなくて、こう

したリアルな感覚に満ちているかどうかということではないかと、だから遊びがとても悲しかったり、つらかったりするということは十分あり得て、でもこれが遊ばれているとしたら、つまりそこであまりに出来事が圧倒的になりすぎて遊びが進展しなくなるってということがないとか、あるいは何か自由連想するようであるけれども言葉が上滑りしているわけではないとか、この場で体験が生起している、ここで新しい体験が起きている、そういうことがあればそれは遊びとしてカウントできるのではないかっていうふうに思います。

ここで言葉というものが生まれてくるし、交わされていくのではないかと、という話をずっとしているんですが、この遊びが成り立つためには設定する、ということが1つ必要で、つまり時間と空間が提供される必要があり、それから解釈をすることってというのはこの中でコミュニケーションを映し返すことなんだと、だから解釈であってもいいし解釈でなくても構わないってウィニコットは考えているだろうと思います。

このような見方は、深く入っていく種類の心理療法が、解釈作業なしでもなされることがあるのはどう言うわけなのかを私たちが理解するうえでも助けになる。その好例はニューヨークのアクスラインの著作である。.....それはつまり、重要な瞬間は子どもが自分で自分に驚くときである、という点である。重要なのは私が賢い解釈をする瞬間ではない。(同書)

解釈については同じような事を何回か繰り返します。

母親は赤ん坊に話しかけたりしなかったりするだろうが、それは問題ではない。言葉は重要ではないのである。

分析家がいわゆる分析をしていて、患者は言語化し分析家は解釈する。それは、言語的コミュニケーションに留まる問題ではない。今話されている患者の材料のなかにある流れが、言語化を必要としているのだと分析家は感じるのである。分析家が言葉をどう用いるかが重要であり、それゆえ解釈の背後にある分析家の態度が重要なのである。(ウィニコット「Communication between infant and mother and mother and infant, compared and contrasted.」)

これを態度と呼ぶのが適切かどうか分からないですけれども、でも自由連想で示されているのは連想の中身であるとともに態度だと、そして分析家が提供しているのも解釈の中身であるとともに態度だと、この態度と態度の間に関係することが成立をしているし、この関係することが培地となって言葉が生まれてくるんだ、言葉がリアリティをもって自己の一部になるんだ、ということをウィニコットは語っていると言うか、まあ語ってないですけど、仮にウィニコットに依拠すればそういうふうに言うことができるのではないかと、その点において遊ぶことというのが非常に大きな価値と必要性を持っているといえるのではないかと思います。

解釈の目的は、分析家を持つ、認識される必要のあるコミュニケーションが為されたという感情を含んでいる。(ウィニコット「Interpretation in Psycho-Analysis」)

つまり受け取ったということのサインとして解釈が行われる、解釈の中身ではなく受け取ったということのサインを返す、ということがとても重要で、映し返すということが、大きな機能なんだというふうに言います。

私がここではっきりと声にしたい原理は、分析家は患者がコミュニケーションしたものを映し返すのだということである。

言葉を変えれば、解釈は全体的人物に与えられさえするのだが、その解釈のための素材は人物全体の一部から派生しているに過ぎないのである。

このように、解釈は洞察への積み上げの一部である。(同論文)

これはウィニコットの経歴のわりと早い段階で書かれた『精神分析における解釈』っていう論文の中の一節なので、ここには洞察っていうことが出てきますが、いずれこの解釈については、分析家がいかに分かっていないのかを伝えるために行われるっていうそういう変遷を辿っていくことになります。

したがって、

心理療法とは、利口で上手い解釈をすることではない。おおよそ、心理療法とは、長い期間にわたって、患者が持ちこんでくるものを与え返していくことである。心理療法は、そこにあって見えるものを映し返してくれる顔からの複雑な派生物である。(同論文)

ミラーリングのことですね。ウィニコットにとっては、解釈をすることよりも遊べることの方がとても価値があって、そのために治療者はそこにいて、受け取ったことを受け取ったと伝えていくわけです。自己の成立はそうように受け取り手を必要としています。

何を解釈するのか、少なくとも心の中で治療者は何を見て、何を知って、何を考えるのかというと、この人がどういうふうに遊ぶことと関係しているのか、どういうふうに遊んでいるのか、それが対象と関係することの水準でどういうことが起

きた上での遊びなのか、この対象と関係することの水準がボラス流に言えば変形性対象がこの遊びの中にどういうふうに立ち現れているのか、そのプロセスのありようを見る、ないしは知る、場合によっては解釈をする、そういうことが分析的な作業なんじゃないかと言っているように思います。

子どもが一人で遊んでいる時に、ここにある一本の木が何を象徴しているのか、というのはもう少し後の課題というか、もう少し重要性の低い課題であるんだっていうふうな話じゃないかなと思ってます。

先ほどの由熙の話をピックアップすれば、

—もうどうあっても、こんなこと、終わりにしなければ……。우리나라(母国)って書けない。中世国語の、訓民正音の試験だった。答案用紙を書いていて、そのうちに우리나라と書く部分にきて、先に進めなくなった。手が凍りついたみたいに全く書けなくなってしまった。

と言った時に、ここで遊びが成立していないということを見るのが重要だと、ウィニコットは言うように思います。少なくとも私がウィニコットを理解するっていうことは、そういうところに目を向けるっていうことなんだと思います。

言葉はこの遊ぶことや遊べないことの体験の中で、自己のプロセスの一部であると同時に、コミュニケーションするためにこれを切り離し、他者に伝達し、伝達され返されることの出来る具体物ともなるでしょう。そして体験を言葉で写し返されるそのプロセスが母親だけでなく言葉との関係として内在化されていきます。

従来言葉は後者、つまり具体物として議論されてきました。「象徴されるもの」を「象徴するもの」としての言葉ですね。けれども、ここでお話をしているのは「象徴すること」というプロセスとしての言葉であり、言葉との関係や言葉の使用という対象関係は、この水準の話なのだと考えていま

す。

例えば우리나라っていうことが、この作家の手では母国って書かれています。我が国っていうふうに書いていたりすることもあるけど、母国ってあります。だけど、ものすごく葛藤的であったのは父親との関係でした。だから父親というものがどこか由熙にとっては母親としての何かがあって、この母親としての何かには、ウィニコットがパーソナリティの男性的要素と女性的要素として話をしていたような同一化を可能にする、一体になったり融合になったりする要素何か父親との関係は、そして우리나라という言葉との関係は、そういう女性的要素を持ったものだった、と考えられるかもしれません。だけれどもこれがあまりにも痛ましくて、ここに同一化できなくなってしまっている、ないしはここにしっかり同一化してしまっている、そういうような関係を読み取ることができるかもしれません。そのような対象との関係することの水準の痛ましさが遊びを成り立たせていない、そうして言葉が使えなくなっているっていうことが、1つの重要な、見るべきものとしてあるのではないかっていう、そういう話をしているように思います。우리나라という言葉は、自分の国という原初の経験を痛みのあるそれに変形し、そのために우리나라の使用は妨げられています。

一方で、韓国に留学をするきっかけがテグムの音がすごく好きだったっていうことがあるわけですが、

—アボジが死ぬ前に、この音を聞かせてあげたかった。

—一番素朴で、正直な楽器だと思う。口を閉ざすから。口を閉ざすから声が音として現われる。

というふうなこの感覚が私にとっては遊びが成立している感覚なんだと思えます。つまり韓国人として生きることができない、この韓国語が喋れな

い、その口を閉ざさなきゃいけない、だけれども口を閉ざして韓国の楽器が奏でられる、そこから音が出てくる、それは言葉ではなくて、言葉の成立するもう一個前に、言葉のない音の段階に立ち戻って、そこからちゃんと声が音になって出てくる、口を閉ざすけれども口を開く、それによって우리나라という経験がそれとして味わわれる、そういうことを成り立たせている水準の話をしてしています。このテグムが移行対象と呼ばれるもので、彼女はここで自分の移行対象を見つけて、音を作り出して、このリアルさに後押しされて韓国に留学してみるってという一歩を踏み出せて、結局それはうまくいかないんですけれども、でもそこを読み取る、そこを理解する、解釈するかどうかは別として、この体験がこの瞬間に十全な遊びの感覚としてリアルな感覚としてとてもパーソナルな感覚として、たとえどんな痛みを伴っていても、体験されるってということが成り立っている、そういうことが起きるのか、その時間と空間を確保できるかどうか、この体験を移し返して行けるかどうか、それを積み重ねていけるかどうか、ってということが分析的な作業であるのです。こうした時間がしばらく確保された後で、ようやく言葉が生まれてくる、우리나라が使えるようになる、というふうに考えることができるのではないかなと思っています。由熙の韓国留学がうまくいかなかったのは、この交流のプロセスがなかったからだ、というふうに考えることも出来るのです。

今、主に大人の自由連想を想定しながら喋っていましたがけれども、一般的に言葉を聞くことや連想を聞くこと、そして解釈をすることが精神分析的な1つの作業だと考えられているのに対して、ウィニコットの文脈ではむしろ連想して、語る人

を聞いているんだと、自由連想を聞いているのではなくて自由連想をしている人を聞いていて、それがリアルであることに向けて解釈をしたり解釈をしなかったり冗談を言ったり場合によっては肩を抱いたりということをウィニコットはしていたんだろうと思います（肩を抱くかどうかについてはいろいろと議論のあるところですけども）。でも1つのものさしは、体験が十全なものとなって、リアルなものとして、パーソナルのものとして、aliveなものとして、考えられる、生きられるどうか、そのことにセラピーの設定は手応えを与えられるかどうか、そういうことなんだという話をしているんだと思います。

言葉の話に戻して行けば、言葉の成立というのは、あるいは言葉を使うということは、何も文法的に言葉を使えることを指しているわけではなく、つまり具体物としての言葉ではなく、これに取り囲まれ抱えられ、その陰影と関係しその言葉を使えるようになっていく、そして矛盾しているようだけれど必ずしもこれは言葉でなくとも良くて、想起され、扱われようとしている何かを表現する何か言葉として使われていく、そういうことであるし、それが起きるのは遊びが成立し、言葉がリアルである場所でなんだ、ということを考えることができるように思います。心理療法というのは、そういう言葉が経験を十全に変形することを保証する場であって、私たちは自由連想を通して、言葉の生まれ来る場所に立ち会っているのではないのでしょうか、ということをおもいます。言葉は経験を変形します。言葉による変形のそのありように、私たちはいつも耳を澄ましているのではないのでしょうか。

文献

C・ボラス (2009) 「対象の影」 岩崎学術出版社.

- S・フロイト (2007) 自我とエス 「フロイト全集 18 1922 - 24 年 自我とエス・みずからを語る」 岩波書店.
- S・フロイト (2010) 心理学草案 「フロイト全集 3 1895-99 年 心理学草案／遮蔽想起」 岩波書店.
- S・フロイト (2010) 無意識 「1914-15 年 症例「狼男」 メタサイコロジー諸篇」 岩波書店.
- 李良枝 (1989/1997) 「由熙」 講談社文芸文庫.
- 三原芳秋・渡邊絵里・鵜戸聡 (2020) 「クリティカル・ワード 文学理論」 フィルムアート社.
- Winnicott, D.W. (1987). Communication between infant and mother and mother and infant compared and contrasted. In Winnicott on the child. Cambridge, MA: Perseus, 2002. pp.70-81.
- Winnicott, D. W. (1968) Interpretation in psycho-analysis. In C. Winnicott, R. Shepherd & M. Davis (Eds.). Psycho-analytic explorations. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1989. pp.207-212.
- D・W・ウィニコット (2015) 「改訳 遊ぶことと現実」 岩崎学術出版社.

投稿規定

1. 投稿資格

投稿は原則として、日本ウィニコット協会正会員、顧問に限る。

2. 投稿条件

論文内容は未刊行のものに限る。

3. 採否

論文の採否、掲載順などは編集委員会が決定する。

4. カテゴリー

投稿する論文のカテゴリーは以下の通りである。

論考：ウィニコットや独立学派精神分析の実践や芸術，その関連領域における，理論，概念，歴史や文化的背景などについての著者独自の見解を提起する論考。12,000字以内を目安とする。

総説：特定の主題についての学問的動向を遠望し，筆者独自の論考を示した論文。12,000から28,000字以内を目安とする。

原著：個人・集団の心理療法や心理検査による臨床研究，観察研究，質的研究，実証研究，また文化や芸術領域等における論考であり，独立学派精神分析とその関連領域についての著者独自の主張が提起されている論考。12,000字以内を目安とする。

著者は投稿の際，掲載を希望するカテゴリーを表題の前に明記すること。

5. 図表

図表，写真などは図1・表1と順序を付け，それぞれに和文で題をつける。文字数の制限に図表は含まない。

6. 原稿の作成

原稿はワードプロセッサを用いて作成する。A4用紙に横書き，40字×40行を目安に原稿を作成すること。

7. 外国語の表記

人名，地名等の固有名詞は原則として原語を用いる。

(例：Winnicott, D, W / Freud, S / London)

8. 引用

文献の主著者のアルファベット順に番号を付し，本文中にその番号を適当な個所に付す。肩付きで(1)

(2) のように記載する。本文の末尾に「文献」という表題にて文献リストを付し、文献を番号順に記載する。各文献は、雑誌に掲載された文献については、著者名、発行年、題名、誌名、巻、ページの順、単行本の場合は、著者名、発行年、書名、出版社名、発行地の順に掲載する。

(例)

(1) 妙木浩之 (2021) : Laplanche の「謎のメッセージ」. 精神分析研究 65 (4) , 369–375

(2) Bollas, C. (1979) : The Transformational Object. *International Journal of Psychoanalysis* 60, 97-107

(3) Patrick Mahony. (1987) : *Freud as a Writer*. Yale University Press. 北山修監訳 (1996) : フロイトの書き方. 誠信書房, 東京

(4) Winnicott, D. W. (1968) : The use of an object and relating through cross identification. In Winnicott, D. W. (1971) : *Playing and Reality*. Basic Books, New York. 橋本雅雄訳(1979) : 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版社, 東京

9. 表題等

表題、著者名、著者所属、5語以内のキーワードをつける。

10. 要約

原著については、本文はじめに 800 字程度の邦文要旨を付す。

11. プライバシー

クライアントのプライバシーに十分配慮せねばならない。臨床研究においては、その情報は修飾することとし、経過の詳細等よりも主張の独自性を重視する。

12. 投稿の方法

投稿の際は、論文の電子データを（原則として Microsoft の Word 形式）を電子メールの添付ファイルとして、日本ウイニコット協会事務局 (jwasecretariat@gmail.com) 宛てに送信する。

理事

会長 館 直彦（たちメンタルクリニック）

副会長 妙木 浩之（東京国際大学/南青山心理相談室）

理事

石田 拓也（追手門学院大学）

生地 新（北里大学大学院医療系研究科）

大矢 泰士（東京国際大学 臨床心理学研究科）

加茂 聡子（四谷こころのクリニック）

川谷 大治（川谷医院）

工藤 晋平（名古屋大学学生支援本部／心理療法室ともしび／NPO 法人風の家）

島村 三重子（宮城野心理臨床センター）

館 直彦（会長）

恒吉 徹三（山口大学教育学部）

中村 留貴子（千駄ヶ谷心理センター）

深津 千賀子（千駄ヶ谷心理センター/大妻女子大学 ）

藤山 直樹（個人開業）

増尾 徳行（ひょうご こころの医療センター）

妙木 浩之（副会長、編集委員長）

山崎 篤（JPS 精神分析的療法家センター）

横井 公一（微風会 浜寺病院）

吉村 聡（上智大学）

渡部 京太（広島市こども療育センター）

編集委員

編集委員長

妙木 浩之

編集委員

大矢 泰士 加茂 聡子 工藤 晋平 館 直彦

恒吉 徹三 増尾 徳行 吉村 聡 渡部 京太

編集事務局

石田拓也 山崎 篤

顧問

北山 修（北山精神分析室） 松木 邦裕（精神分析オフィス）

Jan Abram Patrick Casement Rudi Vermote Christopher Bollas

編集後記

編集委員会の立ち上げ、そしてウィニコット研究の発刊迄、二年以上かかった。約束と違うし、お怒りの声もあるだろう。事務局の石田先生には迷惑ばかりかけている。申し訳ないとともに、どうしてだろう、と思う。最近、私はこの業界からの引退を考え始めてここ数年精神分析に対する感謝とともに、別れが近づいていることを切実に考えている。そのせいかもしれない。

これまでのこの会の前進である「ウィニコット・フォーラム」はとても面白かった。毎年、楽しみにしてきた。この会は、館先生、川谷先生というお二人が仲間として仕事をしてくれたから続けてきた。先生方のおかげで、いつも日本のウィニコット研究は高い水準を保ってきたと思う。だがそろそろ次の世代という発想が、この研究会であり、この研究誌である。だからこの二年間は、次の世代への橋渡しの困難という意味があったのかもしれない。だとすれば、この遅れも意味があり、この巻は、これからのウィニコット研究へのエールのようなものになるだろう。今後も若い優れたウィニコット研究が、日本の次の世代から生み出されることを切に願っている。

幸い、ウィニコットの全集がでて、それを読みながら、良く思うのだが、彼は最初から独自の道を探索するような、論考の書き方をしている。クラインを参照するが、それを鵜呑みにせず、つねに批判的に読み、自分の言葉にし直している。『人間の本性』には、その痕跡があった。また全集が、彼の思考が発展する順番になっていることも興味深いし、全集の提示の仕方かもしれないが、彼の思考が育っていく、と感じる。

できれば、ウィニコットのような、着実な歩みを、この研究誌も続けてくれれば、と思う。

編集委員長 妙木浩之

2022年7月12日発行

ウィニコット研究 vol.1

発行：日本ウィニコット協会

〒543-0001

大阪府大阪市天王寺区上本町6丁目6-26 上六光陽ビル601

たちメンタルクリニック・上本町心理臨床オフィス内

e-mail : jwasecretariat@gmail.com

HP : <https://winnicottforum.com>